

縁ふかしとやら、彼方様の仰せられ候には、たとひ世間に如何なる悪名を囃さるゝとも、身に闇からねば更に疚しき事もなきのみか、もはや彼新聞上にて老官の意を損ねし上からは、官途につく事を断念すべく、よしや老官の疑念を解くに足るとも、元來わが好まざる女に生涯を契るべくもあらず、第一が娘の縁にて其父の威を借りたりなど沙汰せられては、これまで苦勞せし多年の學問も一朝に潰れて男と生れし甲斐もなし、されば、これを幸ひに仕官を思ひ切り民間の業を取るべし、むしろ民の血をもて衣食するは學者の恥づるところなりとの仰せにて、いよく其後は妾の身を捨てさせ給はず、一時も早く結婚の式をあけて日本國中の新聞紙上へ廣告せむとまで、さても勇ましき健氣の思召に妾も蘇み生りし心地いたし候まよ、近きうちに改めて相應の媒酌を選び、不束女が僥倖の良人を持つ事と相成り候、さやうに候へば、妾の一身は此良人のために生死の境より拾はれ

候事に御坐候故、おのれやれ、及ばずながら良人に事ふる妻たるの道は、生命に代へても仕終せ候うて、高等地獄とやらの妾いかやうの貞節を守り候や、また自墮落者といはれし良人が、どれほどの身持にて生涯を終り候や、口善惡なき世上を相手に夫婦ともく心合せて此世を渡るべき覺悟に御坐候、いづれ結婚の上は改めて御たづね申し上げ、猶いろいろの御指圖をも願ひあけまゐらせ候、あらくかしこ、

走書の筆も優しい言葉に哀れを含みて、どこまでも靜に女らしけれど、凛として犯すべからざる女勝りの一際、さては物の道理を辿りて根強き心の一節、かるくしう身を持たず、うかくと世上の風に華を散らさず、我身一個は飽くまで我身一個に取捌いて、顔色にも出さぬ心の高く打上りたる風情、人品のほどを想ひやられて其面影しきりに見たく、またこれほどの女を見出して連れ添ふべき良人、しかも自己が一朝の幸運を捨て、世の耳目を敵としな

がら、眞實の愛と情を盾にして添ひ遂げむとする良人こそ、骨まで馨しき心地せられて奥床しく、それを西洋歸りの新らしき當世紳士とは猶更いよく美はしく、これ等を眞實の道に叫ひし自由結婚ともいふべきか、斯る良人と斯る妻とが手を携へて樂しげに歩む姿を、かの鼻頭の曲みし女學生に見せてやりたく、せめて其足跡なりとも踏ませてやりたきものぞと、同じ女に生れながら黑白妍醜の差別に驚く折しも、入り來りし第七番は年紀二十一、身に纏ふ衣裳の嗜好は只管ら時の流行を逐うて、賤しけれども華奢の届かぬ隈もなく、顔立は世にいふ十人並ながら、色の白きを一徳として日夜不斷に磨きたてたる手入物、されば本來の木地より數倍の美人らしく、身の取扱ひ愛嬌專一に人の氣を汲みて、呵しからぬ事にも笑を含み、樂しからぬ事も我から樂しげに持ち掛けて、頻りに浮世の情に買はれむとする風情、さりとして幼少より氣盡氣隨に育ちたる身の境涯は、おのづから年と共に根性骨を横に太らし

て、我心の進まぬ方には罪なき人をも仇の如く思ひ、恩義ある人の影口悪口さらに疚しいとも思はず、諸事すべて眼前の利害得失、それも眞の利害得失を計るの思慮なく、たゞ指先の小器用の糊付細工をするが如く、ちよこくと一時しのぎの繼足思案に、永の生涯を夢ぢやくと送りたき顔色、おもふに横町の新道に御神燈の影くらきところ浮世の狼どもを集めて、清元常盤津などの師匠といふものなるべし、

第七番

ねエ貴方、凡そ世の中に女くらる、つまらないものはないと思ひますよ、まだ妾なにかア亭主の味を知りませんが、いろんな知合の家を見ますに、大定、女房は朝の闇いうちから起きてて、褌衣のまよでお飯の用意、襷がけに雑巾と箆を持って掃いたり拭いたり拂ッたり、前夜の仕舞事から今朝の膳立から、近處隣家の挨拶やら井戸端の附合やら、一人で八

しなさだめ

人藝の忙しいのも構はずに、奴さんは寢床の中から鎌首もツたてよ、煙草盆の火がないと吐鳴るを機会に、さんざ朝ツぱらから御託を吐いた上、やツとの事で起き上るとソレ湯を取れの、いや茶がぬるいの、箸の洗ひやうが足らないの、なぜ手前は其様に白癡だの、うんてれがんだのと、横町の隠居さんに手を合はして拜んだ三年あとの事も忘れてさ、早く苦駄張ツて仕舞へば宜いと言はないばかりに、御大層な顔をして朝のお飯が済むと、其儘ふいと飛び出して夕方ほんやり歸るが最後、また膳の上の一杯から夜の十二時ごろまで泥酔を極め込んで、それを彼是いやア料理屋で高い酒を飲むし、おまけに情婦でも出来て御覽なさい、まるで女房を人間の取扱しないですもの、一言目にやア手荒な真似をして、男の働きだとさへ言やアお仕舞さ、それにまた子でもありやア猶更の往生、年が年中ほろを下けて泣きの涙で暮すどころか、なんかいふと直に三行半、去った出て行けの一點張で

押されちやア貴方かはいさうに女ですもの、それも二十歳前後なら知らんこと、さんざ世帯じみた大年増と来てから、どうせ二度目の縁に面白い筈はなしさ、今までの苦勞や子に引かされて、身を切られるほど口惜しくツても口ぢやア兎も角も世間の手前、悪う御坐いましたと一度うたツたら、もう叶はないです、奴さん愈々増長して踏んだり蹴たりは常の事、お婆さんになツて腰でも曲らなげやア迎も息がつけなインですから、妾は亭主と極めた人を生涯持たない覺悟なの、なアに貴方、亭主が無クツても充分たツて行きますさ、男も女も同じ人間で、夫婦と名が付けやア其日から差引き勘定の合はない損ばかりして堪りますものか、それよりやア、自分で自分の働きをして、すいた男を幾何でも時々とツかへるが第一でさア、また男といふものア妙にオホ、、、貴方の前ですが、いちの汚いもんですから、此方から好いたでもなし嫌でもないやうに持ち掛けると、やたらに上氣あがッ

しなさだめ

て絲目の切れた奴胤、どこまで飛ぶか知れませんよ、そこでまア平ツたく言やア、男妾を  
 持つくらゐの勢ひで、しかし後家さんが俳優狂ひするやうに此方から入れ揚げちやア舞臺  
 が毀れますから、うまく綾なして、敵にお荷物を荷がせるんですよ、なんの事アない、月  
 月いくらかの入費を貰つて男妾にしてやるんでさア、亭主なんか嫌なこと、この自由な  
 世界で誰が男一人の持物なんかになるもんですか馬鹿々々しい、もよんがアちやあるまい  
 し、氣のきいた化物に笑はれまさア、ねエ貴方、  
 憫れむべし此女の目は斯る境涯に限られて心は斯る境涯の外を知らず、さればとて教へむと  
 すれば皮肉を徹して骨に焦け付いたる女の悪業なかくに度し難く、翌の日ありとも知らぬ  
 眼前の花に躍り狂うて、良人に吐らるゝ世上の妻の愚を笑ひながら、おのが身の果に古三味  
 線を抱へて人の門邊に立ち、皺枯れたる聲を絞りて一文二文の手のうちに老の露命を繋ぐと

も思はねば、果敢なき色を萬年にたのみて飽くまで心強く、尻輕の帶際ひよこくと振つて  
 立去りしあとより、引違へて入り來りし第八番は、おなじ束髪なれど出來損ひの女學生には  
 あらで、巻き揚げし髪毛の艶々さ、首筋元すつと伸びて生際に青味を帯びたる、さては琉  
 球紬の重ね裾に長襦袢の襟模様も晴がましきを嫌ひ、わざと京染の本檳榔を幾度もかけし  
 黒縮緬の綿入羽織ほつとりと重く、一本ぐるみ唐繻子の丸帯ぎゆうと邪慳に引きしめて、目  
 鼻立は中の部なれど、物越の思ひきつたる體に萬事の人品を打上けて、年頃は二十四五、こ  
 れで今まで定まる男のなかりしは何故ぞと、第一の不審は先づ斯女の關所なり、身分は何れ  
 か高等女學校へ勤むる教師としては意氣に過ぎ、花柳の巷より浮びし女としては愛嬌に乏し  
 く、さりとて然るべき身分の令嬢にもあらず、固より商家の奥に育ちし祕藏にもあらず、眉  
 と目の間に浮世馴れたる色たしかに見ゆ、

第八番

妾の家は宿屋で御坐いますが、おかけ様で世間へも知れ渡ッて、まア三府五港の十軒に數へられる旅館ですから、するぶん立派な方ばかり入らッしやいますものよ、さて貴方、男の中に男がないとやら、しかしまた彼方では女の中に女がないと仰しやいませうオホ、ですから、妾なんかは決して男選びの出来る身分では御坐いませんが、まだ極らない内は誰も希望の大きいもんで、ねエ貴方、自分の顔と相談もしないでさ、いろんな贅澤が起りますよ……常に親共が申しますには、逆もお前のやうな氣儘女ちやア此營業の跡を嗣けないから、早く相應の縁を見付けて分家でもしろと、喧しく言はれますものよ、差當り其縁がなくッて今だに獨身で居ります、ですが妾だッて、さう無理な希望をいふのでは御坐いませんの、實は多年の家業柄で種々の方にお交際申して、また其方々が人の知れな

いお浮氣筋なぞを、よッく存じて居りますから、なんだか危険で、男ほど油斷のならないものは無いと思ひますよ、なぜッて貴方、お國では何の某といはれる紳士紳商達や、また御役人なら假にも一縣の知事様くらゐの方で、名譽とか品行とか、四方八方むづかしい中で喧しい事ばかり仰しやる方でも、さア土地を放れて旅へ御越しになると貴方、無効ですよ、いや藝者だの何だのと、御用は三分で御保養が七分、夜の目も寝ないでお騒ぎなさいますのを、お氣の毒なは國許の奥様で御坐いますよ、なんにも御存じないから、暑い寒いにつけての御心配、時候にお負け遊ばさないやう、また災難お怪我のないやう、あまり御用が多くて御持病が出はしないかと、獨りで御苦勞なすッても、その旦那様は、これですもの、病氣どころか生命の洗濯さんさ遊ばして、御身分が善ければ宜いだけ、男振が御立派なら御立派だけに、女といふものよ苦勞を増しますから、妾は決して御身分や男振なぞしなさいだめ

を望みませんの、たゞ上と下の婢女を二人も使つて、雨が降つても傘と下駄の入らない、町の洗湯へは行かない位の境遇で、三歳か四歳ほど年上の方でさへありやア結構で御坐います、もし旅へでも入らッしやる事があれば、どうして貴方、お一人で遣つて堪りますものか、きつと妾が付き添つてまゐりますわ、ゼンたい男の浮氣は旅から病み付くもんですから……

流石は上等旅館の二十歳を越えし娘だけに、物馴れたる目より人間の裏道を差覗いて、妙に悟つたらしき言葉の端々、身分の高きも取らず男振の美きをも選ばず、湯殿を廊下傳ひに構へて雨天に傘と下駄と入らぬほどの男を持ちたしとは、さても浮世の皮肉を穿ちたるかな、されど此女は大の嫉妬と見えて、深く男の浮氣を恐れつと、決して一人旅には出さぬといふ目付の勢ひ、情が過ぎて時に恐ろしき事もあらむか、つゞいて第九番に現れたるは年紀やう

やう十六ばかりにて、世にいふ瓜實顔の色白、おしなべて内氣の性質に多しといへど、目の道具あらくて身振しやんとせし風情は、どこやら外觀によらぬ勝氣を備へて、しかも年には過ぎたる額際の晴々しさ、爪端の洗ひ磨きも思ひの外に行届いて、不斷著ながら絹布の身に添うたる著慣、をりく眉毛を動かして人を視る眼の働きやう、片頬の笑の入れやうまで氣を込めて態とらしき體、おもふに尋常者の娘にあらず、もしその人品風俗より推せば、父は本場の中位を占むる投機商にて、母は其むかし全盛を極めし藝妓なるべし、

第九番

妾はね、俳優なンかより外の藝人が好きですわ、俳優は舞臺顔が幾何きれいでも、あんまり素顔に宜いのは無いし、そして一生、身が持てなくつて薄情ですから、それよりやア義太夫かなンかで、聲の美しい節の上手な艶物語りで、どこへ出しても恥かしくない人をねエ、しなさだめ

同じ藝人でも落語家なンぞア嫌なこと、高座へ上ツて妙な顔をしてべこくお低頭ばかりしてさ、あれでも妻女があるかと思ふと呵しいですよ、もし妻女が聴きに來て居たら何と思ひませう、きまりが悪くツて顔が眞赤になりませうねエ、また幫間も大きらひですわ、妾のお父様が最眞にする幫間で、いつも家へ來ますがね、お酒の相手をしながら何だか頻りにお饒舌をして居るかと思ふと、をりくお父様に頭上を、ぴしやアりと叩かれてさ、そして怒りもしないで、けらく笑ツてるンですよ、ですから藝人は義太夫に限ると思ひますわ、立派な上下で高蔭繪の見臺を控へて、三味線彈を連れて、かういふ鹽梅に反身に人を見下しながら、第一、男らしくツて貫目があツて見醒がしませんよ、それに年が若くツて美男でもあらうもんなら、ドンなに宜いでせう……年いまだ二八にして心は既に道樂藝妓の帶際とツて引戻すべき勢ひ、まことに父が浮雲の富

に育ちて胎内より母の氣をうけしといふべし、恐らくは淨瑠璃文句の道行を其まよ、悪性太夫の喰物となツて身を潰すのみか、親の身代まで潰すは斯る類に多からむと、差違へて迎へし第十番は、わけて女に忌はしき溝割れ額の薄眉毛、耳小さく鼻大きく、頬の平たき唇の厚き、しかも齒並の亂杭まばらに頤の骨尖りて細く、多年の貧苦に責められたる目附きよろきよろ、そこらに物の落ちたるを拾はむとするが如く、皮肉の乾きし手足さんぐくに荒れて、身には古布子の一枚著それも洗ひ張りの著替に乏しければ、みすほらしけに垢づきて動けば、一種の悪臭ふんと鼻を穿ち、糾れたる雙子の前垂も雑巾がはりか膝前かくしか、時には霜夜の燒薯を包む風呂敷ともならむ、鼠色の足袋に指先の現れたる裏底の眞黒なる、頭の結び髪に綿屑の塗れたるを思へば、いづれかの紡績會社へ通ふ職工なるべし、年頃は二十三四、たとひ苦勞にふけたりと雖も、二十一の關は必ず超えしなるべし、

しなさだめ

第十番

お金ですわ、金のことく、お金さへありやア、ねエ旦那、さう思ひますよ、眞實に、しみじみさう思ひますよ、世の中に金ほど……金のある人なら隻眼でも跛足でも何でも如でも亭主に持ちます、たとひ不具でも天刑病でも、金さへありやア此世の極樂ですから、年中うまい食を喰つて美しい物を著てさ、芝居は御坐れ寄席は御坐れ、生涯すいた眞似が出来ますもの、わたしやア男より金が持たたいの、なアに家に居る亭主が、ピンな野郎だから世間の人に知れやアしませんもの、三枚重ねで吾妻コートを著て、高臺の人車で金の指輪を挿めてさ、ほんとに、じれつたいよ、金といふが自由にならないから、金さへ自由になりやア五年の生命が三年に縮まっても構ひませんわ、ねエ旦那、千圓の利息は月に如何程くるもんでせう、念のために教へて下さいな、後生ですから、

あはれや生涯を契る良人よりも天下湧き物の金に心を奪はれて、思ひきつたる生命の關の山が金千圓、その利足が如何ほどぞと、女一代の榮華を僅千圓に足るものと思へる淺ましさ、十圓札の五枚も遣れば白晝の大道に丸裸となつて躍る段か、逆様に突立つて眼をまはすべき憫然に引替へ、第十一番に入り来りしは總身に金色の光輝を放つ令嬢、父御は一國の多額納税者として貴族院の議員にもなるべき家柄に育ちて、世の中の貧乏人といふもの五合榊に一杯ほどの小判も持つまいかと、眉を擧めて侍婢に私語し昔し長者の娘も斯くやあらむと思ふばかりの風俗、身に飾る衣裳の善美をいふは蛇足なり、年は十七八なれど、心は世上の十四五にも劣りて、容色は思ひの外に下れども、まばゆき全身の盛粧に照らされて目鼻立しかと分らず、

第十一番

しなさだめ



妾は田舎源氏の光氏様のやうなお方を持つて、紫のやうになりたいの、いくら性悪を遊ばしても、二葉様は前にお死去なすつたし、眞實のお情は妾一人にあつてねエ、そして外の方は、ほんの其時の御戯事ですもの、たゞ氣にかよるは、もし須磨明石に、駒の爪と呼ぶ庭下駄を直して岡部の家まで御口取する千鳥のやうな、憎い掛橋があらうかと、それが心配で御坐いますわ……

おもふに近縣の長者殿が祕藏娘、父に伴はれて東京の假住居もまだ一二年なれば、すべて田舎氣質の大盡生育に、隙間もる浮世の風を恐れて深窓の奥に養ひ、夢にも當世の教育にかけぬ古流の一粒選なるべし、されば田舎源氏も活版の翻刻物にはあらで、家に藏せる草紙本に始めて人しれぬ春情を運びつゝ、しづけき庭に花の小影の蝶を忍びしならむ、萬事の風情うるうるしく何の罪もなうて一種の愛嬌ありといはどいふべきも、宛ら京人形に衣裳を著せ

し昔の残物、もし父の七光なくば、これぞ賣れ口よりも賣る口の手藪物なるべし、それに引替へ入り來りし第十二番は、いぎりす巻とやらいふ束髪に、身のまはりの小道具一切すべての色取は、西の洋より吹き來る風に育てども、種は正しく日本流の芽生こゝに成長して二十一二、前の第五番に現れたる女學生とは物の風情を異にして、おちつきたる容體、いやしからぬ振方、内は心の思慮に我を謹みて、小袖の重著に一入の優美を添へたる品形、薔薇の輪を青磁の花瓶にいけたらむが如く、いはど肥馬輕車に乗る官人の娘にて、なほ學びの窓に飽き足らぬ高等の女學生、よしや業を卒ふるとも其業もて衣食の道に立つ人品にてはあらざるべし、

第十二番

また妾は修行中で、こんなな身體ばかり人並で御坐いますが、心は充分に一人前の發達いしなさだめ

たしませんから、とても自分の境遇と性質に叶った良人を見ることは出来ませんよ、しかし、人間の希望といふものが常に妾を促して、どんなのが宜いと問はれます毎に、その答だけは、不斷に心掛けて居りますから、試みに申し上げて見ませうか……：幸ひ妾の父は當時相應の官を勤めて、社會の表面にも立って居りますから、むやみに道理のない頑固な事は申しませんで、お前が二十三になるまでの教育、其他すべて親の子に對する本分は及ぶ限りに盡してやるから、その間に自分の氣に入つて世間へも恥かしくないほどの男を選んで置け、しかし結婚に關する一切はお前の自由にもならないから、その邊は間違のないやう、たゞ意志と目的だけを附けて置けと、かう申しますから、もし妾が眞正に見込んで男で、妾の身にも叶ひ父の名譽にも相應の者でさへあれば、きつと……：そこで妾が生涯を託すべき良人には、いかなる人物が宜からうと、なるべく自分勝手の氣儘といふ

ものを取退けて、眼前一時の浮華輕薄に流れないやう、眞面目に考へました末、及ばずながら妾には學者が適するだらうと思ひます、いえ單に學者では漠として何だか言葉が足りませんが、まア斯うで御坐います、假令へば文學なり理化なり法律なり其外さまの専門を或學校の年限に卒へて、そして其を直に社會へ買はれる働手よりは、しづかに社會の裏面を家として自分の死際を卒業期限とする人、いはゞ其専門のために一身を利害の外に委ねて、實地の應用を切賣しない眞正純粹の學者で御坐います、しかしまた教育に従事する學者とは別段の意味で、もし生活の道を求むるならば、書物を著はして其専門のために至大の光明を放ち、少くとも後進を導くと共に將來發達の淵源となる位な、ほんたうの高尙な學者を良人に持ちたう御坐います、妾は陣頭に立って三軍を叱咤する勇猛の大將よりは、幃幄の内閑に勝敗を司どる參謀官が、イツそう好きで御坐いますから、どうしても

しなさだめ

門口の仕事師より奥の室で材料を興へる人の妻を糞ひますの、ですから、もし妾が思ふ通りの學者を良人に持てますなら、その良人は天下第一の醜男子でも構ひませんし、また世間の反對論者に、幾何苦しめられても、人生の貧苦に、幾何責められても、決して女々しい考を出さずに、力の及ぶかぎり良人を慰めて、あくまで良人の勇氣を奮はせる覺悟で御坐います……その専門のため一世の名利を捨てよ著はした書物が、後世に傳はつて其道の人に感讀される時、嗚呼この學者の慘憺たる腦を慰めた妻はと、もし貴方、妾のやうな女でも、學問から放つ光明と共に欣慕せられる事があつたら、どれほどの本望でせう、これはまた天晴れ磨きあげたる女學生ほどあつて、父が時めく官海榮華の飛沫に袖を濡さず、別に清く高き心を飽くまで張り切つて、一代の指南者たる大學者を良人に祈る聲しさ、母としての他日をも想ひやられて慕はしく、しづ／＼起つて歸りゆく後姿を見れば、始め來し時

よりも更に百倍まさる女振とぞなりぬ、それに引き違へて下駄の音さへ慌しう、けらく／＼と高笑ひしながら入り来る第十三番は、根から賤しき文盲野卑の飛び揚り女、しかも浮世の事には悪摺に摺れ切つて、片田舎の酌女を三年ほども仕上げたる風體、此頃やう／＼東京に舞ひ戻つて伯母さんの路次裏に巢を構へ、いけもせぬ番臺面に朝夕の紅白粉、焼いても直らぬ根性骨の横曲り、ベンべら絹の染め替へ物を引張つて、三日の小遣錢になるならば尾羽うちからせし呼子鳥でも網を張るの勢ひ、老いて婆となれば熊鷹眼に裏長屋の鐵棒ひくべき踏張物、年の頃は慥に二十六七なれども、それを十八九に誤魔化さむとする辛氣辛苦の骨折は、いよく狸の化け損ひ呵しき過ぎて哀れなりける、

第十三番

おやく／＼貴方ア、どツかで御見掛け申したやうですわ、なに、さうですか、そいちやア妾しなさだめ

の考へ違ひか知らむ、しかし今晚は、とんだお邪魔様……あのウ、わたしやア斯う見えても下司は大嫌ひですよ、はア幾何意氣な勇肌でも、あんまり好きませんわ、また幾何お金が澤山あつてもさ、でくくした髻むぢやの大男なンざア下さりませんわ、それよかア上品な大家の若旦那風が、ねエ貴方、色が白くつて優形で萬事おとなしくつて物に初心で、そして心底の眞實があつて柔和で内氣で、さうですなエ眉毛の濃い目のぱつちりとした鼻の高い口元の可愛らしい、なアにお父様が頑固でも鐵兜でも、肝腎の本人さへ此方へ抱き込みやア占めたもンでさア、それに第一母親といふものが、絲の繰り次第どうにでもなりますから、其外、番頭なンかア白鼠でも黒鼠でも高が貴方、ひじきと油揚の惣菜で出来上つた代物ですもの、憚ながら妾の腕に覺悟がありますから、三四邊ぐるくと逆様に振つて、めん喰はした上は二度と再び目口を開かすこつちやアないンですよ、そこで

其若旦那を半歳ばかり咬へ歩いて、さんざつばら楽しんで最後に、また半歳ばかり天の巖戸の神隠れで、どツかの穴へ引ッ込んで仕舞つてさ、すまアした顔で高見の見物すると、さア大變です、親類評議やら賣卜者を呼ぶやら、いろんな大騒ぎを遣らかしても貴方、知れますまい、ところで妾が海鼠のやうになつた若旦那を連れて、ひよいと飛び出すのが術で、どうせまた二月ばかり摺つた揉んだの末、とどの結局が生命に代へられないといふ落著で、妾が一足飛びに大家の花嫁御様ドンなもンです、だから此に限らず、見込のない男にやア鼻も放掛けてやらないの、轉ンでも空手は起きない覺悟で、泥でも宜いから兩手にしツかり掴みますわ、よし其事がさ、始めツから思ひ通りに往かなくつても、十人を張つた中で一人出来りやア貴方、一割に當りますもの、

論にも齒にもかよらぬ泥板の惡體女、退散々々の聲をも待たず自己がいふだけの事いひ終ッしなさだめ

て、消えて無くなりし其あとに現はれし第十四番は、すぎし昔の姿に浮世萬人の魂魄を引き抜いて、嗚や全盛どれほどの罪つくつたぞと想はるゝ四四五の女、あはれ萬木の花落ちて淋しき梢と我は見ながら、餘所目の春には猶も残の色の香を袖にとどめて、まだ生命取の色艶たツぶりと得ならぬ遅櫻、浮氣の中にも内心のしまつた藝妓ななどの果なるべし、

第十四番

先生の前で斯んな事を申し上げては、婆の癖に生意氣な女だ、氣でも狂やアしないかとの、お叱りも御坐いませうが、まア妾の懺悔物語と思召して、どうか、ねエ……妾は元來、賤しい家業を致した女で、いろんな殿達に長年の間お交際申しましたから、大底この男女の事は覺悟も御坐いますし、また入り組んだ諸譯なんども、よく存じて居りますものよ、さて貴方、これが外の事と違つて、現在自分の畑になるとオホ、真暗闇、まるで目

先が見えないんですもの、だから未だに此年齢をして、萬一それ相應の縁でもありやア、なぞと……妾は十七の年から三十六の冬まで、二十一年藝妓家業を致しましたから、するぶん古狸の株で御坐いますが、其間にお情をうけた方が都合十九人、まだ貴方、よほど堅い中で御坐いますよ、ですから、お蔭様で御最肩の多かつた割には、不知情の評判を取つた狭で御坐います、しかし其十九人も義理づくめやら達引やら當座の見てくれ一片で、眞實しんから自分の上氣せたなア、たつた一人、ないもんで御坐いませう、そのかはり其一人にやア貴方、なか／＼御話しにならないほどの苦勞いたしましたよ、もしこれが素人の方で、あのくらの男のために苦勞なすつたら、それこそ貞女だの、いや操だのと、御大層な譽物になる筈ですが、悲しい事には根が浮氣家業ですから、なまじツか宜い笑物になつて、結局の果にやア其男にも遁けられて仕舞つた器量の悪さ、實に馬鹿々々しいつたら

しなさだめ

貴方、およそ世の中に此事ほど馬鹿を見ることア、あるまいと思ひますわ、いちく先生方のお筆にでも乗らうもンなら、ドンなに面白いでせう、お談話が枝葉に渡つて恐れ入りますが、近ごろ先生方の御作を拜見いたしますに、をりく、藝妓や女郎衆なンの事を、よくお書きなさいますやうですが、失禮ながら、みんな無効です、無垢の地女は知らず、妾どもの戀と情の遣方行方、取つて放して放してまた取つ絞める鹽梅から、粹ほど深い野暮の出來方なンゾア、逆も、あんな小兒めいた淺墓な事情ぢやア御坐いませんよ、ですから妾なンの眼から見ると、まるで方角が違つて、何だか妙に呵しう御坐いますわ、それでも先生方はオホ、すまアしたお顔で、色女の百人も苦勞さしたやうなお顔で、戀の諸譯の本家本元は此方だよ、まごついぢやア不可ンなぞと仰しやる勢ひ、熱病にでも、おかよりなすつたンぢやアあるまいかと、お氣の毒千萬に存じますよオホ、おや妾

とした事が、とんでもない、餘計なお饒舌をしてさ……ですから、四十五の婆になつた今日、さんざ懲り果てた男を又と再び持つなンゾア、頭から穿鑿の違つた事情ですが、先生よくお聞き下さいまし、こよが浮世で、いくら身に不自由がなくつても、もう取る年の霜枯れ時に女の一人暮しは、何だか淋しくつて心細いもんで御坐いますよ、其上に子はなし親類はなし、友達といつても今は何處に何うしてるか、よし知れたつて水家業の昔馴染なンゾア、猫の鼻より冷たいもので、あかの他人様の方が御相談相手にもなつて下さいますから、いッそ今の色氣のない時に、どツか相應の縁でもありやア、それこそ身代の持ち寄り、杖つき乃の字の用意で、眞實の縁だから互の爲にもなり、また身の行末も悪かアあるまいと、實は斯うで御坐います、年輩五十ばかりの獨身の方で、死んだ妻女の子でもありやア猶更ら結構、營業は何でも宜いから店倉の一軒もあるやうな、手確い處へ後妻に、しなさだめ

ねエ貴方、どうせ花嫁ぢやアをさまりませんものオホ、、、しかし其人が御隠居では困ります、やはり自分の代で、若い時さんざ馬鹿を盡した夢の覺め際、惜しい事したと悔まない代りには、これから十年しッかり遣ッて取返さうといふ位な、達者な勢ひのある人を、希望なんですよ、もし御心當りでも御坐いましたら、どうか御世話を、いえ貴方、年寄の媒酌は後生の種になりますよ、

海山の功を経たる四十女、年甲斐ほどあッて花より團子の身になる注文、さりとして利慾一片に傾かぬ心を思へば、かゝる女の果としては先づ上々吉の部、まして九十九の皺くちや婆を百歳に一歳缺けたりとて、情しりと世に唄はれし昔男の目より見れば、なほ残るどころか、いざこれより咲き匂ふ色香たつぶり花の盛りなるべしと、思ふほどなく代ッて入り来る第十五番は、二十歳ばかりの仔細らしき小作女にて、令嬢ともつかず女學生ともつかず、また商

家の縁遠き生娘とも見えす、花柳の里に近き下地女とも見えす、銀行會社に羽振よき伯父の世話にあづかる風でもなく、奏任以上の官吏の許に細君の妹として養はるゝ姿でもなく、さりとして華族の筋目たどしき侍女にもあらざるべく、紳士の思ひ込だる妾にもあらざるべく、後盾のつく看護婦、大醫に可愛がるゝ産婆、其他いろくくに心を碎いて思ひまはせど、見れば見れば見るほど自體の分らぬ變り物、當時流行の被布を著流して胸の邊に江戸紫の糾總を飾り、長襦袢の模様裙ともに三枚重ねの勢ひは宜けれど、小袖の襟を首筋元に強く引絞めたるは平生の木綿著しのばれて呵しく、ダイヤモンドと見せたき質物挿入の指輪を左右に輝かし、繻珍と名さへ付けば勿體なき女持の手カバンに中の臙物さぞやと思はれ、をりく乾いた唇端を軽く拭ふ西陣織の何とやら、たゞ燈火に映じて赤き浮織の照り渡るを得意顔に、薄化粧の隠し紅、たかゝと度を外れて高き鼻の象めいたるに引替へ、兩の目の甚く落窪み

しなさだめ

て悲しさは、剃り附けたる地藏眉はしう際立ちて、下目づかひの突き出し顔、鬢の毛の人並すぐれて張るを自慢に、宛ら貧乏公家の古女房が捻り鬘を亂せる如く、わざとらしき据ゑ腰、殊更の摺り足、折角の白足袋に鼻緒の痕の色つきしは、下駄さへ見掛けだふしの安物とぞ知られぬ、

第十五番

失禮ながら大定、風俗容色でも分りませうが、妾は、いくら財産があつても學識があつても、また俳優を欺くほどの美男でも、無位無爵の徒輩には決して嫁さない覺悟で御坐いますよ、公侯伯子男のうち、あまり出来ない事もいへませんから、まア中を取つて伯爵ぐらの御當主で、お年が三十までの方で、四五年も洋行遊ばした當世風の開けた御前で、諸事家令舊臣などに舞はされない、凛とした御氣性のうちに、また得もいはれぬ情愛があつ

て、そして何にも御仕官なさらない方と、お馬車に乗つて、往來の平民どもを見下しながら、毎日どツかへ遊びにまゐりたう御坐いますよ、

人間の極樂を華族にあるものと心得て、勿體なや天下の盛衰に關する元動力の往來を、馬車の上より見下して平民どもと吐いたき面相、さては半狂氣の色揚衣を引き摺つて、いかさまに全身を飾りたてたる不思議の風體、おのれの事を自らと言はざりしは殊勝なれど、そもや何者が生み出せし現世の化物ならむ、此女は此まよにして親の顔が見たき心地せられぬ、それに引き替へて入り來る第十六番は、年ごろ十七八、ぱつと人目につくほどの容色ならねど、さらに見飽きのせざる尋常の小娘、荒き紬縞の綿入羽織を手組の細き絹紐もて結び、雙子の一枚著ながら折目の落ちぬを身に纏うて、唐縮緬の肌襦袢に垢染みたる痕もなう、これを他出の第二に數ふる紫縹子の晝夜帯、うつむき勝に思はず常の前垂を見て、あわたしう片

しなさだめ



端に引き揚げたる風情、なんとやら心の内氣しのばれて優しく、おもふに父は或官省に古く勤める小役人にて、母親の片手だけに朝夕の水仕事も嫌な顔せず、せめて下女の一人も連れるを生涯の希望に、傍目もふらで生れしまゝの我分に育ちし娘なるべし、

第十六番

妾は同胞が三人御坐いまして、姉様は去年の春お嫁にまゐりましたし、あとは今年十四になる弟と妾ばかり……姉様の御増様は、お父様と一處に御役所で、お年は丁度お父様の半分ですが月給は倍もいたゞく方なの、その上に御両親も何にも無くって、下女を使つて居ますから、どんなに氣樂でせう、姉様は幸福女ですわ、そして其お増様がね、大變に親切な柔和の方で、をりくく母様や妾にまで、いろんな物を、第一、弟なぞア貴方、家に居るより遙結構ですから、てんで歸らないんですもの、此間も知らない間に學校

通ひの洋服を仕立てていたゞいてさ、ほんたうに御氣の毒なの、姉様もまた姉様ですよ、お嫁に往つてまだ間がないから、ちつたア遠慮をすると宜いんですけど……妾ですか、オホ、……妾なぞア、どうせ……ですけど、妾はね、姉様に負けない御家へ往つて、弟どころか、お父様や母様の著物でも仕てあげたう御坐いますわ、わが住む屋根の上に青雲なきものと思つて、一家の小天地に希望を満たした所が、下女の一人を召使ふ姉に勝つた男とは、さても可愛氣に出来たる小娘の大望、願はくは斯親この子の妻となるまで其まゝの無事息災にあれよかし、もしや不幸の涙に濡れて軒の廂の傾くこともあれば、たゞ一筋に小き胸を破るのあまり、あはれ黄金ある浮世の悪魔に誘はれて、心にもなき汚辱の淵に沈むべしと、見るにつけ思ふにつけて何とやらむ餘所ならぬ心地しつと、不吉なれど行末いぢらしけに送りいだす眼の前へ、入れ替つて現れし第十七番は萬事初心を放しなさだめ

れし二十一二の當世女、洒落か伊達か面倒臭きがためか、わるく言へば我儘氣儘じれつた結び、よく言へば人手をかるべき島田蝶々束髪よりは我手で早き結び髪、顔色ほつと曙の赤みがよりて磨きあけたる艶々しさ、目鼻口元すべての道具はツきりと元氣よく、身のまはり衣裳の外見は華麗を厭うて内證に奢りの沙汰、しぶく仕立てと飽くまで人目を嫌へど、やッぱり女ぢやもの見られたいが精一ぱいで、時の流行に勝つほどの勢ひなければ、紺セルの合羽めいたるものを左に抱へて、兩袂の本天太緒、足袋も仕入で御坐なく、失禮ながら足首を出しての誂へ物、煙草めすには相違なきも、さりとして勸工場の店賣でなしとは、これまた云ふに及ばぬ風體、どうやら待合料理屋などの評判娘が誤つて書物を讀みし身の果、いや今が御身の眞盛昌なるべし、

第十七番

妾は妙な性分で、女に好かれる男よりやア、男に惚れられる男が宜いの、何だか生意氣をいふやうですが、色の生ツ白い氣の弱い骨のない、南風に逢うた飴のやうな、でれつとした丹治郎さんよりは、ほんのこつたよ來て見や、齒は立つめエといふ木場の藤さんが結構ですわ、當座の風次第お心よしの柳男よりは、すつと地から生え抜いた黒松の大木男が好きですよ、たとひ芝居を見てもさ、兩花道の本立で編笠を脱いだ鹽梅ぢやア、持てる名古屋より觸られる不破の稻妻さんが好もしいんですよ、會我の十郎より五郎の勇氣が好物、だから當世の髻にしてもです、ほしやくの赤薄で床屋が剃る時、旦那もし此お髻は剃るんですか残すんですかと問はれるやうな、なさけない冬枯のした髻は嫌です、それよりやア生黒の大髻で、顔に髻があるといふより髻の中から顔が覗いて居るほどの思ひ切つた髻男が好きです、相服かなンかで細い象牙頭のステッキで漆のやうな磨き靴よかア、ぶくぶしなさだめ

くした玉羅紗の外套に埋まッて揚面の外見なしばう、薪雜木のやうなステッキで赤皮靴の大跨が氣に入りますわ、ゼンたい何でも殿様風は大の嫌、骨節の確然した一癖物で、きかない氣の男が堪りませんわ……ですから、もし妾が眞實の希望をいふなら、職業まで男らしいのを、職業の男らしいンでは、あの羽振の宜い辯護士なンざア随分おもしろいでせうね、出身は學士とか博士とかの肩書で、決してお金なンぞに、びりつかない權利義務を俠骨に押し通してね、一方からア何黨の何の某とかいはれる旗頭で、無論、衆議院にも籍が御坐いますよ、そして貴方、どんな火水の中へ抛り出しても驚かないかと思やア、また世間に笑はれる愛嬌があッて、もぐりの三百屋に民法から割り出した金錢上の事を遣り込められ、あゝさうか、おらア知らなんだよ、なぞと眞面目で澄まアして居てもさ、人が騒いで持て囃すやうな辯護士を、ねエ貴方……嫌なこッてす、お金と衣裳を剝いでし

まやア丸裸で凍え死ぬやうな吝な男は、

なかくくえらものだよ、なアに細君がと、いはるゝ女は斯る類なるべきか、その邊は良人に嫁して後のこと、行末しかと分らねど、まづくたどの鼠であるまじき十七番のあとへ、第十八番の鬮として入り来るは十九か二十歳ばかり、烏の濡れ羽色といふべき艶髪を、おとなしう品よき蝶々に結び立てよ、はづかしけに差俯く風情、しをらしき自然の振り方、しかも衣裳萬端それに叶ひし高尚優美を缺かねば、御顔の道具どれほどの美人かと思ひの外、あはれや左の一眼むざんに飛び出でよ日に晒したる蠣の如し、

第十八番

ねエ貴方、こんな女に生れつきましたから……これさへ御承知で、三度の御飯いたゞけるなら、どんな處へでもまゐります、

しなさだめ

唯これだけの言葉を出せしまよ、右の一眼より涙はらくと滾せし哀れさ、聞くも氣の毒、見るは猶更ら辛さ痛はしの面影に、おもはず鼻うちかんで幾度か首肯きつよ、御道理お心お察し申しますと見送りし背後へ、はや現れて待ち構へし第十九番は、満面痘痕の大女にて、年は二十一二、身體髮膚の膏ぎつたる勢ひ、傳へき昔の板額をしのばれて怖ろしく身丈五尺四五寸、されど女なれば女の六尺にも勝りて見え、しかも横太りの體量たしかに十八九貫目、ぶっしりとして宛ら小山の動きいだせる如く、肩幅の廣さ胸邊の高さ、咽喉首には幾條の輪を入れて垂乳房の重けなる、用心せずば夏の炎暑に惡臭を發すべけれど、これを清く洗うて生理學上より豪傑の種取とせば、なか／＼に得がたき希世の逸物ながら、いかにせむ元來の野卑に生れて咲いた花をも踏み躪る文盲無識、動くは舌と心の賤しき利慾のみなり、

第十九番

貴方きいて下さいよ、妾だつて出産から斯ンでもなかつたんですが、運が悪くつて痘瘡神に可愛がられた結句に實に苦勞ですよ、しかし、いくら苦にしたつて今更ら叶ひませんから、なアに諦めて居まさア、どうせ満足な好いた男を持たないからにやア、まよよ人の外妾にでもなつてやらうと思ひますわ、おや何故お笑ひなさるの、廣い世界ですもの、外妾の相場も一から十までありますから、そんなに笑つたもんぢやア御坐りましねエだ、眞實にさ……これでも、白髮七分の赤毛三分で黒いのが空になつた玉蜀黍の化物爺なら、きつと二つ返事で承知しますアね、しかし其化物爺に金がなくツちやア此方から御免ですよ、なぜつて貴力、お金の外妾になるンですもの、かはいさうに妾だつて、心ちやアいろンな男選びもしますさ、けれど思つたばかりで何の功もないから、仕方なしに涙を呑んで玉蜀黍に身をまかす氣にもなるンですよ、誰が杖ついて出る花婿なソを嬉しがるもンでしなさいだめ

すか、これも浮世と思やアこそ……その代りに貴方、お覺悟なさいよ、隠居様を心から大事にかける外妾たア外妾の出来鹽梅が違つて居ますから、さんざつばら不貞腐れを働いて、またそれ相應の色男も稼がうし、ちよいと暗闇の轉寐ななかで、どんな掘り出し物に當らうも知れませんし、それが段々面白くなつて、事に寄りやア玉蜀黍の根へ熱湯をぶツかけても遣りますさ、なアに早く枯れツちまやア、幾何かの形見分も出るでせう、第一が、死ぬまで女にこびりつく爺ですもの、いやに深なさけの情愛があつて、悴は別に身代を譲つたから此家を此まゝ手前に呉れるなかと、とんだ僥倖になるかも知れませんよ、よしそんなにならなくツてもさ、爺の色狂氣は別なもので、つまり若い人よりやア勘定になりますから、なアに表面は食はしてくれて月に三四圓の小遣もありやア、結構です、あとは流々細工の品玉、種は此方にありますから、

これほど岩乗の身を碎いて眞面目に奉公せば、二人前の給金も取つて衆にも賞められ、果は手固い番頭の戀女房にもなるべきを、慾に目のない悪女の大白癡、死際ちかき好色の隠居みつけて一時に物せむとの企謀、なるほど斯る女も世には多けれど、今時に外妾おくほどの粹隠居が、孫のやうな赤襟にこそ皺を伸ばせ、なんとして十八九貫目の痘痕女に腰の弓勢ひつたてゝ老の矢を放つべきや、おもへば行末に破れ布子まとうて三界の首枷を背負ひながら、十町四面の米屋の立札みてあるく女なるべし、これに引つどいて入り來りし第二十番は、ひよろりと背のみ高くて色青ざめし瘦女、臆病者の目には薄闇の幽霊と見ゆれど、元來肺病でもなき元氣どこやらに含んで、潤澤のなき唇端に一理窟いひたけの勢ひ、年は二十歳前後、二年ほど前に女學生の姿が嫌になりし女ならむか、

第二十番

しなさだめ

妾は新聞記者が希望で御坐います、いや貴族だの豪商だの美術家だの工業家だの、また軍人だの醫者だの官吏だのと、なるほど人間名譽の範圍内には随分いろんな職業もあります、が、一身の小にして軽い割合に責任效能の大にして重いのは、およそ新聞記者だらうと思ひますよ、第一貴方、一本の筆よく時論を起し時論を収め、三寸の舌よく天下の導火線となつて、ひどくまるれば國家の利害得失にも關しますもの、ですから大臣だつて金持だつて何でも斯でも世上一切いはど手のうちの生殺自在、實に愉快で高尚で、そして束縛はなし遠慮はなし、これほど立派な男らしい職業は外にあるまいと思ひますわ、ねエ貴方、ですから妾は、一黨一派の機關紙でない獨立公平の新聞記者で、かの無冠の王ともいふべき見識を備へて、國民からは意志の代表者と仰がれ、政府からは民間の羅針盤と見られるほどの學才名望ある人を、ねエ………ほんと思つても氣味の宜い勇ましい境遇ですよ、

手に持つて紙に落しかけた筆は王侯相將も止めさすことは出來ず、また已めた筆は萬金を積んでも再び動かないで、たゞ自分の一心が感動するまゝに、ねエ貴方、これが人生の精華で御坐いませう、

いづれ今日の世上に新聞記者を良夫に祈る女は、皆かゝる高尚雄大の心あるに相違なきも、さて口でいふほどの新聞記者が河原の小石同然、ごろく〜と其處四邊に轉り居るや否や、名の正しうて實の曲れるもの、影の大きくて本尊想ひの外に小なるもの、さては屁の如く聲のみあつて姿なきものさへ多き世の中なれば、御用心々々々折角の大願成就が、徒らに白癡おどし弱蟲いぢめの筆助が妻とならずんば幸なり、上等の紙屑拾ひ生きた活字の女房とならずんば幸なり、また捏造種の原稿ふりまはして怪訝の役徳にあづかる強持て先生の細君とならずんば幸なり、乃至ほんといふ額を叩いて反身の説法に通を氣取る猪鼻助の鼻とならずんば幸なり、

しなさだめ

ば幸なり、來ずもがなの招待狀うけて宴會の席上つうくしく罷りいで、あれが記者先生の令夫人と敬せられずんば幸なり、乞ふ自愛し玉へと送りいませし庭前に五人の女つらりと立並びぬ、おどろいて仔細を問へば、いかに冬の夜長といへど餘りの大勢にて、聽て鶏が啼く曉にも近ければ、これより大略を申し上げて御免を蒙りたしといふ、なるほど時に取つての御遠慮、さらばと聞けば、

第二十一番

妾は國の爲めだの、無上の名譽だの國民の義務だの干城だのと、さやうな、むつかしい事は存じませんが、たゞ軍人を男の中の珠玉と思つて、いッそ慕はしう御坐いますわ、生きて居るうちの勇ましさを立派さ健氣さ、死んでは猶更ら、不吉の屍の上にも貴方、末世末代までの花が咲きますもの、そして第一、平生の氣性といひ品行といひ、さッぱりとした水

の流れるやうで……女に生れたからは、どうせ良人を持つからは、軍人の妻に、わけて貴方、大海原は我墓場とか唄ひます海軍の人の、ねエ、

第二十二番

妾はお医者様、醫は神につぐ至仁至愛の職ですもの、およそ世の中に、生涯の間このお医者様の恩をうけないものが御坐いませうか、鐵や石で作つた鬼のやうな人でも、生れた時と死ぬ時の二度は、ねエ貴方……また天下を顛倒して片手の掌上に握るほどの英雄でも、朝風一感で直ぐ弱る疾病といふ怖しいものをオホ、指先の加減ちよいと治すのは誰でせう、御医者様ですわ、だから妾は……

第二十三番

妾は、私立學校を立てゝ在らッしやる方に……それも高等教育や専門の學校よりは、しなさだめ

完全な初歩の普通學で、尤も組織の宜い規則の正しい萬事の整備した私立學校の校主を……國家といふものゝ一部が此内から産れて出ると、そんな大層な思慮は無くツても、せめて世に名をあげ社會の爲めになるべき人が、十人のうち一人ぐらゐる必ず出るだらうと言はれ、また實際に出すほどの立派な眞正の教育家を……高等教育や専門學は四期の衣服同然で、初歩の普通學は身體だといひますもの、

第二十四番

實業上の力と經濟上の學とを兼ねて、そして別に天生の風韻を帯びて居ますから、自分は常に自分の仕事だけで、申さば半日の暇を閑靜に暮さうと思ツても、世間から騒がれて氣の毒なほど名譽の重荷を持ち込まれ、しきりに困る困ると遁け廻ツて居るやうな人を……さうですね、年頃は妾の倍でも構ひませんの、男は前額の禿けかゝつた五十を盛壯といひますから、第一、それ位の年輩でなげやア、どうせ、それほどの人はなからうと思ひますよ、なに貴方、なま若い人は萬事に頼りなくツて心細う御坐いますもの……

第二十五番

妾は、無形の學理や空想の詩人めいたのよりは、手足の動くところ實際の物體に現れて、その術と共に千百年の後までも社會の利益を残すやうな、立派な大技術師を……無論なんですよ、自分は餘りに言ひませんが學歴上工學博士の肩書がついて、そして技術は猶更ら天下に並びないほどの人を……筆や舌は時候の挨拶さへ無器用で居ながら、鐵と石と木と土を持ってば、それこそ海と山を取替へて、雲の中にも掛橋を作るやうな大技術ある人を……生意氣を申すやうですが、妾は、千百の詩歌を一日に吟詠する人よりは、半日かゝつて煙草盆の一個も細工するやうな人を……とかく思想界の顔色の青さめたしなさだめ



身體の細い幽靈のやうな人は、いくら高尚な事を言ツたり優美な事を書いたりしても嫌ですわ、なんだか人間が哀れッほくて小さく吝臭く見えますもの、

第二十六番

妾は凡ての人間を何とも思ひませんから、富貴だの名譽だのと人間の外部から強ひて飾りつけた彩色は、却ツて賤しく汚らはしい極めて小なるものと思ひますよ、そこで願はくは宗教家の妻になりたいといふ念が……およそ人生に宗教家ほど高く清く大なるものは無からうと、いえ無いです、何故ならば、その信仰力に依ツて真正の善と惡とを知り、罪といふものゝ解釋を世に教へる至仁至愛の職分ですもの、だから女と生れて一夫一婦の天制に従ふ上は、妾も幸ひなる其一婦となつて廣大なる其一夫を扶け、及ばずながら生涯を宗教のために盡したい精神です……そもく夫婦の愛が何うの斯うのと、その小さい

愛の厚薄深淺に依ツて互の利害となり一家の盛衰に關するなどは、乃ち真正の宗教心が無い夫婦のこツてす、だから單に世間普通の女といふ上より考へても、常に暖かく樂しき安心立命を得ようとならば、決して宗教家の外に無いと思ひます……

第二十七番

妾は著述家を良人に持ちたう御坐いますね、ですけど乾燥無味な理窟ッほい四角四面な著述家よりはオホ、ねエ貴方、小説家を……どんなでせう、小説家といふものが自分の妻に對する鹽梅は……もし筆の上で見る十分一ほどの情愛があつてもさ、結構ですよ、

第二十八番

妾は大工場を持つて社會必要品の製造に従事する人を、さうですね、職工の數千人も使ツしなさだめ

て、其外また、これがために衣食して居る者は、直接間接どれくらあるか知れないやうな、大工業家の妻になりたう思ひますの、しかし株式組織や合資會社は嫌です、すべて一個獨立の所有で工業界の王ともいはれるほどの人を……さうなれば妾だつて遊んで居ませんよ、良人に負けない氣で、その數千人もある職工の妻や娘を集めて、また別に何か女子の大職工場を立てますわ、そこで妾も一個の女王様……ピンなに愉快でせう、

第二十九番

妾は、在野の政治家で、その一言一行が時の内閣に響くやうな名士を……いくら良人が家外で腦を痛めて來ても、妾は家内で珠玉のやうな愛情と華のやうな快樂をあてがつて、すぐ一夜のうちに療治して仕舞ひますから、また翌日は元の勇氣で出掛けませう、ね貴方……もし政敵の四面重圍に陥つて腦が破裂しさうな時は、なに妾も一處に討死の覺悟

ですよ、討死たつて別に死ぬことも出来ませんから、まア何ですな、夫婦が手に手を取つて、どツか遠い田舎の温泉へでも落武者となりますのさ、其處で充分に銳氣を養つた上、機に乗じ變に應じて再び良人と共に出るなごア、どれほど愉快なものでせう、だから妾は政治家に、しかし壯士あがりの亂暴者や、演説かせぎの日傭取や、御多分づきの頭數になる政黨屋は嫌です、眞平御免を願つて、イツそ奏任官くらゐな、役人の奥様で大臣の内立關から良人の機能を演べにまゐりますわ、

第三十番

妾は妙な性分で、騒がしい都會は嫌、その中央で忙しい事業などは猶更の嫌、ごとくと車馬の音が響いたり、煙のやうな塵埃が舞い込んだり、製造器械の汽笛が絶えず鳴つたりする中で、土藏づくりや煉瓦の建て詰つた四角な窓の下に暮す人は、よくまア生きて居ら

れるこつたと思ひますよ、だから妾は年中駒込の別荘ばかりに住んで、月に一二度しか日  
 本橋の本宅へは歸りませンの、しかし駒込も、まだ妾には騒々しいから、いっそ、どツか  
 の山奥へでも這入りたい氣がしますよ……妾は同胞の中でも別物にされて、ミンなが  
 女の仙人だなどと悪口を言ひますの、ですから妾の性分として、もし良人を持つなら、し  
 づやかな片田舎で浮世を放れた豪農か、さもなげやア、山林の影に水の流れて居るやうな  
 閑靜な土地で牧畜の業でもする人か、また照渡ツた月夜に雁の聲をきよながら植物園を見  
 廻りに出て、歸宅のおみやげには妾に詩歌の一首も見せてくれるやうな人を……

第三十一番

妾は日本一の書物屋で、文學上に關した出版ばかりをする家へ……文學者といふもの  
 は高尚優美なもので、世の中から尊敬せられる割には、實際あまり世の人に厚遇せられな  
 いといふ事を、聞いても居りますし、また見ても居ますから、文學者は昔より貧乏と極ッ  
 て、この貧乏に屈しない強情な我慢な人をまア、其中の文豪とか氣骨だのと、申しますも  
 のよねエ貴方、人の出来ない貧乏してさへ立派な男ですもの、もし人に過ぎた自由を與へ  
 て……おや、さうですか、文學者に富といふものは禁物ですか……しかし貴方、  
 文學者だつて尋常の人間ですから、野菜より肉食が滋養だと言ひませう、五圓より百圓の  
 方が多いと申しませう、なに貴方、上等の衣食住を嫌惡のやうに言ふのは、可哀さうに、  
 逆も生涯に上等の衣食住が出来ないからの瘦我慢でいふんですよ、それも文學の歡迎せ  
 られない往昔なら、また俗世の時流と戦ツたの、百年の後に知己を待つとか言へますが、  
 まづ兎も角も今日のやうに尊敬せられる世の中で、殊更に貧乏を誇らなくつても宜からう  
 と思ひますわ、ですが何ういふものか、今でも矢張り文學者に貧乏人が多いから、妾は財  
 しなさだめ

産家の大書肆へ嫁入ッて、大に其良人を扶けてさ、原稿料を紙數なンかで買はずに、あらゆる困難の文學者を養ッて、少しも衣食の顧慮ないやうにした上で、充分おもふまよのものを書かせて上げたう御坐いますわ、どんなに面白いでせう、どれほどの功德になりませう、いろんな人が集ッてさ、しかし大抵の文學者は見掛によらない料簡の小さいもので、年中めよしい事に怒ッたり笑ッたり泣いたりして居るさうですから、さぞ喧嘩の絶え間が無くッて騒がしいでせうね……：：：：：なアに貴方、眞實に確然した立派な文學者なら、いくら何といッても動くまいし、また養はれに来る必要もないでせうから、その邊は大丈夫、たゞ尋常かいなでの文學者を助けようといふ目的なんです……：：：：：

第三十二番

妾は斯んな思慮を持つて居ますの、良人として妻を愛する情は無論、いはなくッてもです

が、まづ希望を十二分の割合に立てよ、男振の美しいのが二分で、財産が三分で、一分の風流氣があッて、名譽と學識とをあはせて三分半、あとの一分半が幸運で、都合十一分を引き去ッた残りの一分が、あまり物に頓著しない大様な人品を、ねエ貴方、職業は何でも宜いのでいづれ以上の注文に叶ッた位の人なら、まさか見苦しい境涯でも御坐いますまいから、おや忘れたこと肝腎の年齢を、お爺様ぢやア嫌ですわ、年は妾の五歳まで上の人……：：：：

第三十三番

いくら身分が宜くッても、いくら學識才能があッても、いくら財産が多くッても、またどれほどの美男でも、身持の悪い人は嫌、品行さへ方正で、そして義理人情に厚い人なら……：：：：：しかし夫婦の衣食住に事を缺くやうでは困りますから、どうか妻子とも十人の人を相應に養ッてゆく位な力を……：：：：：其外に何にも希望は御坐いませんの、よし望んだッてしなさだめ

思ふ通りになりませんから、それは妾の運次第に致しますわ、  
 十三人いづれも當世生育の令嬢達にて、年頃は十七八より二十一二までの間、さして際立つ  
 ほどの美人もなければ、また見苦しきほどの醜女もなく、身のまはり衣裳萬端の嗜好も様々  
 ながら、まづおしなべて夜の襖も木綿の夢は知り給はず、三度の飯も御給仕なくては召上ら  
 ぬ境涯ならむ、されば目も心も自ら大空の霞ばかりを見て、下界の脚下に浮世の秋を御存  
 じなきまよの春にうかれ、おもひづくりに劣らぬ希望は天晴れ健氣なれども、元來が縁といふ  
 もの侍婢のやうに自由ならねは、手前の注文とどいて先方の品物うごかぬ御腹立もあらうか  
 と、影ながら御心配申し上げて送り出せば、引き違へて入り来る三十四番の女、年頃は十八  
 九、島田鬻がツくりと根は落ちて緩めども、忙しき當座しのぎの搔撫でに妙を得たるや、さ  
 ほどに亂れたりとも見えぬ髪持たしやう、おめし縮縮の縮入羽織に荒き棒編の南部小袖し

どけなく著流して、裾はらくと下模様の赤きを厭はず、この冬の夜寒に素足の伊達は黒本  
 天の太鼻緒に冴えて雪の如く、すべての肉置ぶつてりと肥えて、眉の濃きと眼の晴れたるに  
 一段の愛嬌を含み、生際の富士額と口元の力みしに重ねくの色を添へ、なんの形見や鼻の  
 左に粟粒ほどの疵痕まで、結句ものゝ風情を作つて男の目をひく基となり、おのづから襟に  
 染む白粉の香と口紅の痕を見れば、やさしき品はなけれど色たつぶりの情らしきを專一に、  
 どこやら蓮葉一ぱい物に怖れぬ氣を帯びたる風情そもく何女ならむ、身に比べて咽喉の細  
 からぬと年に似合はぬ聲の太きは、これぞ當時流行の女義太夫と見しは癖目か、しかも身の  
 扱ひ言葉の端の依なる勢ひ、ばらがきと世にいはるゝ措切女の類なるべし

第三十四番

おやく、晴がましい事ね、此席で何ですか、自分の思ッてる男を、きまりが悪いよ、しか  
 しなさだめ

し出たが最後の切腹場、えと構はない、ありつたけ言ッてしましますから、冷かしちやア嫌ですよ……御存じでせうが、わたしやア高座もんで、さうですね、十四の春から晒しぬいて居ますから、男なンざア珍らしくも何とも思ひませんが、さて女ですよ、これでも自分がおつう妙に思ッた人の前ぢやア、つい馬鹿々々しい氣にもなりますのさ、つい貴方、人氣家業のこッてすから、なるべく其顔色を見せないで、オホ、玉は無論ないから、まア石も瓦も一列一體、怨みツこなしに愛嬌を振りまくんですもの、じれつたい事があますよ、なぜ斯んな藝人になつたらうと思ッてさ……その中でも一番に骨の折れるなア書生さんですよ、ゼンたい書生なア迎も柵取にならない代物で、しどみツ貝の水運びですが、ひツくるめて大隊進めの頭數で絞りますから、つまり大きいもんですよ、それに妾等の人氣客は書生が五分で地廻りが二分あとの三分が尋常の聴衆ですから、この書

生といふもなア大事の音頭取で、うまく飼ひ付けて置かないと飛んだ否運を踏みますわ……だから自然に書生客が多くッて、をりくうンざりしますよ、しかし何も家業ですから、てんぐくに自惚心の増長してる眞向額を覗ッて、ちやらッほこの坐なりで仕入のお世辭をふりかけてやりますと、さア堪りませんわ、もう眼が見えぬ一切夢中で、なけなしの裏口を引き開けて、どうだい御飯でも食べに行かうか、席へ出るに間もないから酒は止すが宜い、なぞと色男にでもなつた氣でさ、凄じいぢやありませんか、しかし其處が此方の腹で、奴さん今日は三圓ぐらゐるだなど見込のついた時にやア、すぐに其袂と引き止めて、しみく情にからんだ聲は手のもんですから、さも深切らしう、あら又そんな事をなさるよ、人前ぢやアあるまいし、二人の中で無効ですから、妾家のお茶漬でもあがッて、今夜の席へ出た時に何か一圓ばかりのものを樂屋へ入れて下さいな、妾も顔がよくッて貴方の名しなまだめ

も、いや／＼いッそ此方へおかしなさい、どこで何うして打捨るか知れたもンぢやアないこの浮氣男や、なぞと言ッて其鬚口を邪慳に引揚げて中を改めますの、そして三圓しかない時は心配さうに眉毛を寄せて、貴方これだけですか、これッばかりで何ですぬエ餘計な事を、妾の二圓を入れて都合五圓にしておきますから、辛抱なさい、徒費しちやア不可ませンよ、ほんとに世話の焼ける人だ、と其まゝ戻しにて暫時は放し飼の體で、七八日も立つと直ぐに十四五圓になつて來ますのよオホ、／＼、／＼、これでも資本が入りますわ、もしまた斯んな奴さんが一時に立て込んだ時にやア、却ッて仕事が樂ですよ、おもひきり鞘當をさして、さんざッばら氣を揉ませた上で、まんべんなく御用を押し付けるンですから、まるで町内の御祭禮に軒別の鳥目を集めると同じ事ですア………そして書生の中でも國元の宜い學資の澤山な坊様には、萬事てツとり早く、始めツから一切べた／＼の色仕掛、大

おとし小おとし家業の涙で、おはれツほく持ち掛けて取るだけの身の皮を剥いた上、逆様に振ッても鼻血の出ないところで、二三個月の下宿料を立替へますの、すると貴方もう本藝の幕明ですよ、妾も東京に居られないとか何とか遁れッこのない義理と情の柵にかけて、席亭の十日も休む覺悟で其坊様の故郷へ人目しのぶの落人筋、並松白壁づくりの伯父様や伯母様が寄ツて、おのれはなアの強意見で摺ツた揉んだの真中へ妾が飛び込んで、死ぬ死ぬの二三邊も言やア忽然十圓ぐらゐの日當になりますよ、そこで御用は先づ結局、此男まだ物になると思ッても、追々あと連が問へて居ますから、さう一人にばかり掛ッても居られませンのオホ、／＼、高座よりやア、まアこの方が本職のやうですから、四五年の内には随分お金も出来るだらうと、お思ひでせうが、どうして／＼、また其お金を横合から吸ひ取る奴があるから堪りませんわ畜生、しかしこの畜生が妾等の生命の洗濯で、斯快がなくッしなきだめ

ちやア貴方、誰が苦勞して貧乏しますものか馬鹿々々しい……その男ですか、そりやア各自い로운な希望があつて一概に言はれませんが、まア妾なンざア妻味の帯びた勇み肌の遊人で、さうですネエ、ちよいと簡單に言やア三十四個處の刀疵、これも誰ゆゑとか何とか、氣が遠くなるほど意氣な中音で爪弾のしのび駒、そして御本尊が與三郎もどきの人ですよ、

女義太夫といふもの、萬事ほつとりとして仔細らしく情らしく、艶物としてからが義理と戀との切なき涙一色、大物となつては鐵槌で石を叩くやうなる事のみ語つて、おのづから其身も人情に深かるべき筈なれど、真相は浮氣みちくたる大ばらがきにて、地獄の上の一足飛び、なかく度胸の据りし曲物多しとかや、されば斯る女も珍らしからじと今更に呆ると折しも、第三十五番に現れしは年頃二十三、瘦形の色白ほつそりと世にいふ小女房の組立、

銀杏返しに揃はねども薄桃の珊瑚を根掛にして、古渡唐綾を真似たる赤地の絹雙子に襟附の額裏、荒き立縞の結城銘仙これも半織仕立の身格相應うつりよく、肌著の襦袢と前垂とは第一の華奢、下駄と足袋とが第二の華奢、萬事あだに過ぎて品を缺けども目色いきくとして物に吝つかぬ決斷の風情は、父祖三代生え抜きの江戸ツ子にて内證よき町内の頭の娘、あゝでもない斯うでも嫌に此年までの獨身と見えたり、

第三十五番

御免下さいまし、妾は貴方、妙な性質で、何より斯より相撲取がホ、今時の女で相撲なんかを彼はいふと、まるで狂氣同様に扱はれますが、持ツたが病で、どうしても思ひきれませんの……なまじツか上品ばツた木像よりやア、男らしくツて嫌味がなくツて、これほど立派なものはないと思ひますよ、なるほど、春畫草紙の殿様みたやうな男を美しいなさいだめ



とか言ッて騒ぐ眼にやア、化物にも見えませうさ、容貌ばかり無様に大きくッて何の役にも立たず、物事ぞんざいで首尾がなくなッて、色は黒し額は馬鹿に平ッたし、耳が潰れて鼻が満足でなし、おまけに大飯大酒の大胡坐、牛のやうな聲で無闇に高笑ひしながら時候の挨拶一事ろくには出来ず、年が年中ぶらぶらして著物といやア四尺何寸で袖は織足、それにもまた病氣にでもならうもんなら其時こそ大變、山門の仁王様を横に打仆したやうで、萬事に手数のかよつた經濟の悪い厄介な荷物で、どこに何うといふ戀著のないやうですが、さて貴方、まア著物を脱がして御覽なさい、親から譲りのまんまで少しも飾りッけなしの裸體百貫、地から生え抜いた巖乗の骨節で、雲をつく肩胛張ッて日本晴の土俵へ上る時の美事さ、いくら何と言ッても外にやアありませんよ、力足ふんで左右の踵を砂に埋め、青天井を額越しに中腰を極めながら、鬼でも掴みころす猛勢で、しいッくと金剛息を吹く

毎に、櫓おとしの大髻が浪のやうに揺ッて、ほんたうに男の中の男ですよ、勇健の中の華ですよ……だから妾は人に何といはれても構ひませんわ、幕内三四枚ぐらゐの手取力取で、人氣の宜い、愛嬌のある、なるッたけ圖抜けて大きい見上げるやうなのをホ、

花柳の巷に育ちし三十前後の女ならば知らぬこと、當世の娘氣質としては珍らしき好事に似たれども、春の霞に打出だす櫓太鼓の遠音は今もなほ響き渡りて、江戸長崎や國々の文句も其まよ懐しう、かよる境遇の女には歌舞の菩薩の音楽よりも嬉しかるべし、つゞいて第三十六番に現れしは、これも二十歳の上を一つ二つの年頃にて、卯の毛の隙間もなき日本古流の上品粧飾、琴の組も茶の湯の席も生花も、さては和歌の道、調理の獻立、裁縫の手業、十種香の銘にも驚かぬ風情を備へて、よろづ馴れたる諸禮がよりの摺り足、つまはづれの奥ゆかしなさだめ

しさ、坐の取りやう身の振方、すべての女一色わざとならぬ法に叶ひて、容色は十人並ながら瓜實の中高いやさからず、わけて目鼻の運轉を軽々しう持たねば、おのづからの品を作りて薰物の馨る心地しぬ、されど萬一その點を打たば、此上に一寸ばかり背を高くして、首筋元を二分ばかり伸ばしたく、生際あまりに黒く彩ると、どうやら眉尻の跳ね過ぎたると、物いふ聲の人柄に比べて細からぬとのみ、身分を何ぞと問へど、なか／＼に打明けまじき謹慎の氣配、おもふに江戸徳川家の大奥に勤めし醫者か坊主の今なほ有徳に暮して、雅俗の間に此娘一人を珠玉と育てしものならむか、

第三十六番

妾は親共が舊弊で御坐いまして、當節柄の事は少しも存じませんから、逆も洋服を召して口髭のある方なぞに、どうして宜しいやら、どうして御機嫌を取るものやら、さッぱり御様子が分りませんし、また先様でも御不都合で入らツしやいませうから……さやうで御坐います、もし身分相應に叶ひますなら、骨董屋かなんぞへ参りたう心掛けて居ります、しかしその骨董屋も、店前に道具を並べて往來の人を相手に致すやうな、俗に申す晒物屋へはホ、、、、ちと参りたう御坐いませんの、願ふ事なら、洗ひぬいた表一面の格子戸で、お這入りになれば寂びた中庭に明竹の葉越しかなんかの春日燈籠が見えて、住居は別に土廂の深い坐敷がより、お客様は兎も角も席へ御案内申して、不束な手前でも差上げた後、手を鳴らして御注文の品を取寄せ、また御時分なれば會席の御相手も致しながらしづウかに商賣をするやうな骨董屋……それで御坐いますから、名は骨董屋でも眞價は鑑定家同様に、世間にも重く用ゐられ、同業にも尊ばれ、また高貴の方々にも御膝を並べて、これは斯うと附けた一言が、その當時の折紙にもなりますくらゐな人を……そしなさだめ

してまた扱ひます品は、たとひ盗まれても構はないほどの結構な物ばかりをホ、ホ、盗まれて構はないものは御坐いませんが、お金や著物のやうに類の多くない銘物ですから、盗んだつて貴方すぐ知れますもの、どうせ賣人も買手も相應いたしませんから、

これはまた當世ちよいと飛び放れたる希望にて、なみくの娘氣には心もつかぬところを、流石は靜に思慮の深きほどありて、その身の嗜好より生み出したる風流五分に商買三分、あとの二分を浮世の案樂に渡らむとする面白さ、まづ今の世の強ね物變物といはゞいふべし、さてその次の第三十七番は、年頃十八九の令嬢風、揚卷の束髪みごとに襟首の三本脚あきらかに兩鬢の生下りは色の白きに一入際立ち、頬の薄絹、耳朶の櫻色、目千兩の切目に無量の愛嬌を湛へて、丹花の唇に力味を帯びつゝ額すつと自然に強岨からぬ横顔は正しく美人の本色、眞向の御顔いかに絶世の尤物ならむと思ひの外、あはれや南無三寶、親指さへ自由に出入すべき鼻の穴はツと會釋もなく押し開いて、しかも上向の煙出し、さながら名玉に龜裂の入つたる心地して、氣の毒とも笑止とも差對うて挨拶のせむやうもなし、

第三十七番

妾は商業家を、しかし物品を直接に扱つて自分が手を下さやうな、小さい狭いのは嫌です、ならう事なら三府五港その他の要所々々に立派な支店を構へて、本店は無論東京で、日夜四方から來る郵便や電報をテーブルの上で切盛するやうな、富と機敏とを兼ねた快活な商業家を、……ですから東京の本店に居ることは稀で、年中いつも汽車や汽船で飛び歩いて、夏と冬だけは温泉か別荘へ引き籠りますのよ、そこで妾も決して家にばかり居りませんわ、どこへ行くにも良人にくつついて、衣類や手道具までも一切すべて旅といふものを目的に拵へた品で、生涯の半分は他國の上等旅館で暮すやうな、おもしろい身分になしなさだめ

りたう御坐いますよ、いくら名譽があつても地位が高くつても、朝夕おなじ召使ひの顔ばかり見て奥深い一室へ押し籠められるのは大嫌ひ、どれほど丁寧にしられても、猫の額のやうな築山や泉水を眺めて暮すのは大嫌ひ、是が非でも十日に一度はステーションを見せしてくれる良人でなけりア嫌ですわ、一年も筆筒の前に据ゑられて居やうもンなら、それこそ病氣が出ますよ、

月に三度の御勝手遊樂、年に四度の演劇、をりくくの月雪花にては逆も御承知のなき奥様風、生涯の半を旅に暮すべき當世快活の商人とは天晴れ健氣なれど、良人の不在を預りて内外の家事一切を整へむとはせず、もろともに馳け廻つて東西南北いたる處の旅館に世を送らむとは、ちと鼻先の御人體あらはれる輕々しう、事によれば一年連れ添ふ良人の顔も古臭しとて、心ひそかに見飽き玉ふ身の末あらむかと覺束なし、つゞいて入り來りし第三十八番は、

面の道具いづれも無事に揃へども、色は淺黒くて目のうち何とやら凄味を帯び、すべての容體のツそりとして騒がぬ額越しに人を見るのみか、ひきしめたる固き唇端にも冷かに物を笑ふが如く、高き背を我から屈めて身を潛めながら、をりくく首を伸ばして反るが如く仰ぐが如く、瘦せたれど骨太の組立、笑窪はあれども乾きたる底に露なくて、鬢の毛の縮みたるを苦にもせず、首筋に遅毛の多きも其まよ、萬事うるさしといへる顔面に陰氣みちくたれば、手足の指の爪まで赤味を失うて、人並すぐれし衣裳も可惜ら月なき夜半の雁金とぞなりぬ、されど流石に身分の卑しからぬにや、起居振舞おのづから絹布に馴れて角も立たず、才氣あふれて學びの道にも淺からぬにや、言葉さへ當世めいて加之も男まさりに演立てぬ、年齢の頃は二十四五、

第三十八番

しなさだめ

縁といふものは殆ど神の手函に秘せられて、その函の蓋が開くまでは一切すべて無益の沙汰、いくら焦心しても騒いでも成るやうに成る外は、逆も薄弱な人間の力に及ぶまいと考へますよ、ねエ貴方、ですから妾なんぞは決して手に取つたやうな確固な事を申しませんが、まづ其事を假に定めてホ、さうですか、それぢやア必ず出来るものと思つて、思ひきつて、申しませう……妾は人と違つて注文が少々面倒で、失禮ながら能く御聞き下さいませんと、何だか妙に曲れて、事を好むやうに聞えますから、どうか貴方、よくねエ……もし妾に、うらよかな春の野邊と淋しい秋の景色と、春秋いづれを選ぶかといふ問題には、花咲き鳥歌ふ和氣洋々たるよりは山瘦せ水涸れた秋の寂寞荒涼を取りますわ、ですから男も、衣食住安樂に生涯を無事太平に送るより、無論、世の逆流に立つて轆轤不遇の境に毅然たる人、いつも陣頭に寄せ来る敵を睨んで居るやうな人で、圓轉滑脱とか稱

へて風塵の間を巧みに渡る才子才物よりも、叩けば音のする奇骨稜々として、むしろ好んで天下の難局に飛び込むくらゐな人を、ねエ貴方……結局、味方ばかりあつて前後左右から拍手喝采されるお目出たい人物よりは、四面楚歌の聲で敵ばかりあつて世に憎まれる人の事ですホ、こんな事を言ひますと何だか謀反人を望むやうで、妾までが毒婦に見えるかも知れませんが、決して、そんな野心めいたのでは御坐いませんの、まづ朝野の政黨なり社會の事業なり、其他一切の人事、ある目的を達するに最初から終局まで圓満無事に進むものではなく、いづれ何か其間に障礙があつて、ために利害得失の議論上、必ず敵味方の出来るものと致しますれば、妾は善惡ともに附和雷同して多勢の頭数につく人よりは、假令いふところ行はれずとも獨立獨行、あくまで四面八方に當つて少しも屈しない人の意味で、時によれば其事業に然ほどの障礙なくとも、活氣を添へて進歩を促すため、

わざと一場の衝突を持ち上げ物議を惹き起すほどの仇役を望みますわ、ひらツたく申せば、軍人として日夜しきりに砲煙彈雨を待つ人、醫者としては難治の奇病に當りたい人、商人としては經濟紛亂の真中で腕を試したい人、政治家としては快刀亂麻の技倆を施したい人、すべて事々物々その一身を賭して少しの未練氣もなく思ひきつて目覺しい活動をする人なら、たとひ奸物といはれても何と誹られても、敵の重圍の中で此良人を天とし、生涯の苦樂は愚か、時に取つては、どんな事でも致しますわ………

一代の俗流を破つて奇々奔放せる豪傑かと思へば、また陰險の器を抱へて世にいふ策士に似たる節あり、あくまで正義を取つて動かざること山の如き大物かと思へば、また事を好んで物を攪亂せむとする小人に似たる節ありて、言ふところ道に當らず理に合はず、いつしか鶴に類せる名聞功利の怪物を描きつゝ、これを天晴れ世にあるまじき所夫とせる心には、さらに

一點の尊ぶべき眞理なくて、たゞ一筋に目覺しき活動を望み、たゞ一場の快に生命を賭する勇氣のみを願ひ、果は亂れて物の無事を厭へる不所存は、おもふに歴史の上より鼻先の智慧を絞つて選び損ねしものなるべし、つゞいて入り來りし第三十九番は、見るからに清けなる十五六の小娘、冴え渡る雪の富士額に黒々と取揚けし前髪あふるよばかりに盛り立て、眉は心ばかりの八の字となりたるも一入をかしう懐しく、いきくと張り詰めし目元に我は知らねど飽くまで男殺しの本性を備へて、古今の名畫も此物一個にて満面の美を作る鼻筋の尋常さ、寒紅を含まねど色いつまでも褪めぬ唇端の愛らしさ、薄絹もて張りたらむが如き頬の肉には曙の櫻をうつして、凜々しう引しめたる頤の要所に卵の毛の弛緩もなう、年に合はして瘦せもせず肥えもせぬ中肉中背、その羽二重肌より漏れ出づる手足の爪端まで、うまれつき可愛嬌を湛へて珠玉を展べたるかと怪しまれ、おのづから左右に流れおつる地藏肩、すツしなさだめ

と自然に押し据ゑたる柳の腰附、燈火の影に坐しながら白き前齒一二枚に總身の色を宿らせ  
て、にこりと笑うたる風情いよく曲物、あはれ此まよ浮世の華の二十歳前後となれば、此  
女どれほどの罪を作るかと行末おもはれて心憎し、されど衣裳は身に比べて下々の下、たゞ  
垢つかぬ雙子縞を纏うたるこそ、結句ながれて落ち行く末の怖しけれ、

第三十九番

妾なんかは家がいけませんし、仕度も何にも出来ませんし、ちよいと出るにも斯んな衣裳  
ですもの、口惜しくツて、口惜しくツて、だから一生御嫁に往きませんわ……嫌なこ  
と、お嫁に行くに笑はれに往くやうなものですから、それよりやア、さんざ今のうちに精  
を出して、もう二三年もすると藝妓になりますわ、ほんとに藝妓ほど宜いものはないのよ、  
父様や母様も承知の上だし、また彼誰が然様いッて頻りに勧めますから……藝妓にさ

へなりやア自分の好いた粧飾も出来るし、おもつた事は自由になるし、毎日お客様と遊び  
歩いて、年中いろんな人の中へも出ますから、運次第で、はたらき次第で、どんな立派な  
處へ嫁かれるか知れませんもの、

酒の酔に刃物、青二才に大金、貧乏人の家に過ぎたる娘、いづれも危きものにて末の末まで  
無事なるは稀なり、されば今こよに此娘も美人に生れたる不幸、十一二のころより額際に賣  
物の銘をうたれて、いつしか我身も貧を歎き餘所を妬むのあまり、浮世の華を慕うて賣物に  
なる月日を待ち兼ねつと、果は我から魔界に飛び入りて生涯の罪を作れども、さらに其罪を  
知らで夢の榮華に露の色情を争ふもの、およそ人間これほど哀れに淺ましき境涯はなかるべ  
しと、おもひつと見送れば脚下かるけに出で行く姿も、いちらしや何者にか襟髪つかまれて  
宙に提けられゆくが如し、

しなさだめ

をりしも東天やうく白みかよりて、西の雲には宵の星影ちらほらと残りながら、はや空を渡る旅鴉二啼三啼、さてはと心急いで聲をあけつゝ、四十番の最後にあたれる女いかにと呼ばば、百歳の半婆になほ二十歳ばかりを重ねたる七十の皺くちや、五十年の昔は鶯啼かせた事もあらむが、今は兩眼おほろにかすみて手足も枯木となり、白髪染せむにも頭は焼野の尾花、耳は遠寺の鐘の音、口は蛇の棲むべき洞の穴、梓の腰弓のしきりく仲ばせども、寄る年浪の敵に責められて防箭一發も叶はねば、杖を力に脚下とほく歩みながら、おもはず庭の飛石に躓いて、やれどツこいしよ、南無阿彌陀佛と念ずる掛聲、なか／＼老いても隅には置けぬ洒落婆なり、お婆さん危いよといへば、はい有難う御坐います、かう見えても槻の組立、まだ確固ものでハ、ハ、ハ、と齒もなき口をあけて笑うたる顔は、曉の霜に映じて一入さらに物凄し、

第四十番

はい、御免下しやいまし、妾はね孫女が病氣で寐て居りますから、その代理に上りましたもので、いやもう、いろ／＼な事で、年寄に苦勞を掛けますよハ、ハ、ハ、孫女は貴方、このし十七になりましたね、妾の口から申しては何だか呵しう御坐いますが、する／＼餘所の娘様に負けない容色で、それは貴方、うるさいほど諸方から貰ひに來ますが、妾が斯うして目の黒いうちは、めつたな處へ遣りませんの……身代が宜くて男振がよくて恰憫で達者で眞面目で親切で大揚で、ねエ貴方、浮氣な人を持たしては生涯かはいさうで御坐いますから、身持の堅いのが第一で、第二は、吝な男を御免蒙りますよ、はい、けち／＼した人は義理人情を缺て世間の交際が出來ませんから、そして親もない同胞もない獨身でさうさ、ね、親類はあつても宜う御坐いますから、なるべく金を持って口數のきかない伯しなさだめ



父様一人と、まさかの時には直ぐ駆け付けて世話をしてくれる伯母様が三人ぐらゐる、其外は入りませぬ、何にも入りませぬ夫婦たゞ氣樂な差對で、たまに妾が往かうもんなら、それこそ大騒ぎ、お婆様が來たつて貴方ねエ、夫婦で手がぎにして奥へ通して、齒が悪いだらうと魚類は鰻かなんぞで、今日も居ろ明日も泊つてゆけど、まるで歸してくれないやうな深切の婿で、その上に活動があつて思慮が届いて、如才がなくて謹慎が深く、日本國中どこへ出してても退歩を取らない立派な男を持たしてやりたう御坐いますの、お婆さん孫女のために大氣焔を吐いて立去りしころは、夜も明け渡りて白髯の森の葉色も見え透き、隅田川の朝霜を割る櫓の音、法泉寺の念佛に伴ふ木魚の響、曉の冬を傳へていとど身に染む折しも、愛犬智備の一聲ワンと吠えしは、はや霜おく堤上に人影の通ふなるべく、眠獅庵の燈火も今は光輝を失うて赤く障子にうつりぬ、

四十人の女さままゝ心いろく、見るに従うて人品を思ひ聽くに隨うて行末を想へば、またこれ一夜に得たる悟道の端くれ、あらくざつと拾ひあつめて浪六全集の第三編に備ふ、

# 浪六全集

第三編終

しなまだめ

# 浪六全集

第四編

八軒長屋

前編

浪六先生獨得の滑稽と諷刺とを以て天下の讀書界に一服の清涼劑を與へし『八軒長屋』の縮刷いよく出てたり

第五編

八軒長屋

後編

袖珍特製天箱美裝携帶至便  
定價各壹圓拾錢郵稅各八錢

大正三年八月廿三日  
大正三年八月廿三日  
大正三年八月廿三日  
大正三年八月廿三日  
大正三年八月廿三日  
大正三年八月廿三日  
大正三年八月廿三日  
大正三年八月廿三日  
大正三年八月廿三日  
大正三年八月廿三日

印刷發行

浪六全集第三編

定價金壹圓三拾錢



著者 村上信  
發行者 青木恒三  
發賣者 加島虎吉  
印刷者 平井登



發賣所

東京市日本橋區  
本石町三丁目  
東京市日本橋區  
人形町通住吉町

電話本局長三六六番二一六七番  
振替貯金口座東京一七四四番  
電話浪花一九四九番  
振替貯金口座東京一九八四二番

至誠堂書店  
至誠堂小賣部



大正著名文庫

法學博士 和田垣謙三先生著 ▲挿畫 川村 齋藤兩畫伯 三色版木版敷葉

兔糞錄

●批評一斑 收むる所百三十餘篇、悉く金玉の響きあらざるはなし、先生例の輕妙洒脫  
飄逸奇詭磊落奇拔、奇想天外の構想により噴出したるもの、一讀再讀三讀四讀尚且然  
館くを知らざらむ、兎に角如何のものにやと一度手にして先づ電車裡に之を讀む。然  
るに我知らずフ、ンと噴き出して向側の乗客に恠しまるゝと屢々也。宅に持ち歸りて  
む、又しても家人の恠しむ所となり、遂に書中の説明を爲せば一時に笑聲起りてフ、ン  
所に非ず、キヤツクと叫ぶ●評者は臆を解き腹を抱へ又泣かされたり、實に滑稽の奧  
に涙を蔵し、謙謙の底に人生の眞理を寫す世を啓發し人を誘導し無限の活教訓を含む古今  
獨歩なり 請ふ、何人も一本を手にし賜へ

人の運

●人生の榮枯盛衰は常ならず。昨日錦繡を纏ひたるもの今日は黧模を纏ひ、今日荷車を挽  
く者明日は自働車を驅る。貧に泣く者あり、病に泣く者あり、不遇に泣く者あり、神に  
祈り佛に祈り、賣卜者にまて訴へて止まざるに至る。桂月先生は涙あるの文豪也。人の  
爲めに泣き、世の爲めに泣く。此書先生獨得の快筆と其半生の辛苦とに成りて、人も勵  
まし人を慰め、人を導き人を諭す。眞に是れ當代の福音。此書を身解する者は何人も必  
ず好運ならむ。

四六判全壹册  
定價金壹圓貳拾錢  
郵税金八錢

大正著名文庫

杉村楚人冠先生著 ▲四六版特製美裝全一册

へちまのかは

●本書は現文壇の重鎮楚人冠先生が二十餘年の心血を凝がれたる力作なり先生の文才氣  
煥發行く處として可ならざるなくキビキビと齒切よく霸氣稜々人を凌ぐの概あり然も  
行文流暢趣味深甚蓋し本書の如く個性のよく發揮せられたるもの天下其比を見ず是れ  
先生一代の傑作集

紙數四百五十頁  
定價金壹圓貳拾錢  
郵税金八錢、清鮮廿錢

村上浪六先生著 ▲四六版特製美裝全一册

罵倒錄

●浪六先生曰く「あまり大膽なる露骨なる無遠慮に過ぎたれど、實  
際これが、我輩の近來に於ける快文字なり」と、其縱横無盡の快筆  
は社會萬般のあらゆるものに對して吐きたる罵倒錄にして警句  
あり冷笑あり諷刺あり一讀興趣湧出して巻を掩ふ能はざらむ、  
以て罵倒錄の内容を知らるべし

定價金壹圓貳拾錢  
郵税金八錢、鮮清廿錢



杉村楚人冠生著 從來二冊にて金貳圓五拾錢たりしもの縮刷美裝  
 生著して金壹圓參拾錢の至廉にて文壇の珍璧を得

合本縮刷

大英游記  
 半球周遊 全

袖珍特製美本  
 天金箱入全壹冊  
 紙數八百頁  
 定價金壹圓參拾錢  
 郵稅金八錢

德富蘇峰先生の評に曰く、「杉村君は英語に達者にして英文に通ず歌人は坐ながら名所を知る如く君は坐ながら歐洲の事物に通ず斯人にして筆を載せて歐洲に遊ぶ眞に是れ鬼に金棒。……又曰く、著者は名詮自證其の筆端眞に縦横也筆を使ふ舌を使ふが如く、舌も尙及ばざるの概あり俊利哀梨を喫するが如く冷刺骨を透す」と。前年本書の一たび世に出づるや好評噴々爲に洛陽の紙價を高からしめしが今回合本縮刷の上裝釘を新にし訂正を施し以て再び此に江湖に見ゆ。先生の犀利なる觀察眼と精緻なる筆致とは讀者の眼前に興味津津たる世界の一大縮寫圖を展開して坐ながら異國の風物に接するの感あらしむ。

浪六先生著

現代男女の戦ひ

口繪實況寫眞コロタイプ版

誠實の和陸は戦ひの後にあり神聖の戀愛は男女衝突の後に生ずる男女あらゆる階級の衝突男女あらゆる思想の衝突是を讀まざる者今日の男女にあらず

菊判美本三百頁  
 定價金九拾五錢  
 郵稅金八錢

浪六先生著

現代男女の戦ひ續

裝幀川村畫伯浪六先生各苦心の大意匠

社會あらゆる階級を網羅せし男女の戦ひいよ／＼白兵戦に入る男女兩性を赤裸々に剝出したる人生の裏面史なり

菊判美本三百頁  
 定價金九拾五錢  
 郵稅金八錢

浪六先生著

黒雲

口繪 北澤樂天畫伯

女主人公は嬋天下の標本也此間に細君の鼻息を伺ふ牧野貞一と之を見兼ねし磊落豪放の田村剛三とを排し波瀾曲折よく強弱醜美の對照を描く

菊判美裝三百頁  
 定價金九拾五錢  
 郵稅金八錢

浪六先生著

雪達摩

口繪清方畫伯木版廿五度刷

此首伊達には所持致さず入用次第賣渡申候云々と嗜き出せし快男子の面目は著者獨得の痛快なる筆によりて遺憾なく現さる是れ小説よりも奇なる事實譚

菊判美裝三百六十頁  
 定價金壹圓廿錢  
 郵稅金拾貳錢

# 井上十吉先生著

## 英作文教科書

English Composition for Middle Schools

本書は我國英學界の泰斗井上十吉先生の著にして全部三卷之を中學三年以上の程度に配當せり其配列は從來諸書の缺點に鑑み必ずしも文法上の順序に依らず別に一定の方針に依り思想發表上重要な問題を骨子として其難易によりて按排し更に他の注意すべき點は練習問題によりて之を會得せしめ學生をして興味を惹起すると共に日常必要の智識を秩序的に修得せしむるの方法を採れり本書は中學教科書として將た英學獨習者の良師友として實に斯界最近の曉星たり

### SUPPLEMENTARY ENGLISH READERS

從來中學英語教授上完全なる補助讀本なきは教育界の一大恨事なり、井上十吉先生之を慨嘆せられ茲に本書の著あり、全部三卷其の難易によりて中學三四年の程度に配す、各卷内容に至つては特に意を用ひられ先生の該博無邊なる知識より斬新剴切にして而も興味津津たる文のみを撰擇し、動もすれば無味乾燥に流れんとする英語教授の弊を掃蕩し能く讀本の缺點を補ひ完全なる教授の効果を收めんことを期せり、實に本書は中學教科書として必要缺く可からざるのみならず又獨習書として英學生必携の最良師友なり

文檢部定全卷一定價金貳拾五錢  
省部定三卷一定價金貳拾八錢  
省部定三卷一定價金貳拾九錢

大正十文檢全卷一定價參拾錢  
二部定三卷一定價參拾貳錢  
年二部定三卷一定價參拾八錢  
月省濟册卷三一定價參拾八錢

陸軍教授友田宜剛先生著 (大正二年十二月 文部省檢定濟)

## 新編中等文法教科書

全貳册 上卷 金貳拾貳錢  
下卷 金貳拾四錢

本書は我が作文文法世界の彗星たる友田宜剛先生の著にして上下二卷文部省改定教授要目準據して編纂せられたるものなり先生文法教授に從事せらるること十有六年よく教授の得失に鑑み効果の如何を顧み先生獨得の考案と實行とを參酌し從來の文法教科書が徒に舊法に拘泥して實地に遠きを排し只管其の結果の作文上に見はれんことを期せり本書上卷には先づ言語文字より入りて品詞の解説を試み下卷には文の結構を示し之を連繫して文法上最も大切なる助動詞よりは洵に先生の創意に屬す本書は實に時勢に應ずる新しき文法教科書として敢て推薦に堪らざるなり

文學博士幸田露伴先生序 文學士幸田成友先生冠註

## 冠註古事記讀本

四六判特製 定價金九拾五錢  
全壹册 郵税金八錢

古事記は帝國最古の典籍なり太古祖先の生活史なり殊に國語を以て記述せる點に於て最も史的價値を有す惜むらくは昔字大學院の難澁なる到底國語を以て記述せる點に於て最聖代の遺憾と云ふべし幸田先生獨得の以て新研究を發揮す起して情感の益涌するを覺み釋し其地理の獨創の至りて附し懇切丁寧の一讀興趣を發起す起して情感の益涌するを覺えしむ忠君愛國の人士は奮て此祖國唯一の寶典を讀め

世界に卓絶せる此の帝國の如きは建國の創世記を有す

作 文 界 の 雙 璧

大町桂月先生著 ▲四六判特製箱入美本紙數壹千壹百頁全一册  
**文章大辭林** 定價 金 貳 圓 郵 稅 金 拾 貳 錢

文章家 座右の 大寶典 世評一斑

●讀賣新聞曰く、先生初學有志の爲に此書を著はす上編を自然門とし下編を人事門とし成句熟語を挙げ俳句を添へ古今名流の作例を收めたり文章に志すもの、應に金科玉條とすべきもの而も讀み易く解し易し

●國民新聞曰く、作例は古今の名文より採擇したるものにして清少納言あり子規あり高蹤あり露伴あり西鶴あり紅葉あり其他芭蕉、白石、柳北、獨歩、漱石、虚子等名流大家にして殆んど擧げて漏らさざるに庶幾し

友田宜剛先生著 ▲四六判特製箱入美本紙數壹千三百頁全壹册  
**聖代作文新辭林** 定價 金 貳 圓 郵 稅 金 拾 貳 錢

文章の泰斗友田宜剛先生が十五年間作文教授法研鑽の傍絶えず蒐集せられたる材料と廿餘年間實地作文添削の折節摘録せられたる材料と積んで山を成す其純を擇び其材料の豊富や多方面にして而も適切ならしめしもの實に此聖代作文新辭林なり其材料の豊富や多方面にして而も適切ならしめしもの實に此聖代作文新辭林なり其材料の豊富や多方面にして而も適切ならしめしもの實に此聖代作文新辭林なり

●讀賣新聞曰く、先生初學有志の爲に此書を著はす上編を自然門とし下編を人事門とし成句熟語を挙げ俳句を添へ古今名流の作例を收めたり文章に志すもの、應に金科玉條とすべきもの而も讀み易く解し易し

●國民新聞曰く、作例は古今の名文より採擇したるものにして清少納言あり子規あり高蹤あり露伴あり西鶴あり紅葉あり其他芭蕉、白石、柳北、獨歩、漱石、虚子等名流大家にして殆んど擧げて漏らさざるに庶幾し

陸軍教授 友田宜剛先生著  
**青 年 の 修 養** 四六版全一册 定價 金 五 十 錢 郵 稅 金 六 錢

人として修養なくんば繁がざる野馬なり羅針なき船なり現代の如き過渡期の險惡なる思潮に處して一刻も修養を怠らんか忽ち渦中の藻屑と化すべし殊に大正維新に際し國家發展の大任を双肩に擔へる青年諸君は修養以て其實を擧げざるべからず先生曩に禪と内觀とによりて病苦艱難より脱し以て今日の豐饒たるを得たり本書は即ち這般の趣味あり根柢ある修養法を發表せるも敢て之を諸君の机上に呈す

陸軍教授 友田宜剛先生著

先生曩に諸方講習會の講習録たる此類の一書を公にせられて東都の紙價を高められしが本書は更に其後四年間の新研究新講演を網羅組織せられたるものにして文法を根柢としての先生獨得の妙案に特に其長所を發揮す學校の備付は勿論綴方教授法の虎の巻として又檢定志願者の良師友として机上欠くべからざる良書なり

菊判特製全一册 定價 金 壹 圓 五 拾 錢 郵 稅 金 十 錢



編一第書叢文漢譯新

新日本外史

本書は近世の偉人絶代の文豪頼山陽が一生の心血の凝る所議見卓拔筆力雜麗古英雄一々紙表に生動の干戈の聲恍として机上に起る成敗の跡火を見るが如く大義爲めに明らかに天下の士氣爲めに振ふ所に東西書類の假名遣に依り小學兒童にも容易に讀むを得せしむ嗚呼外史は斯くの文に復すべし難解の字には解釋を附し治亂興亡の因を尋ねて奇抜痛快の批評を今て永遠に活すべし難解の字には解釋を附し治亂興亡の因を尋ねて奇抜痛快の批評を今加ふることを極む山陽が當時の偉人を讀みしことまでも遺憾なく顯はされて桂月先生獨得の妙を極む山陽が當時の偉人を讀みしことまでも遺憾なく顯はされて桂月先生勵ますべく以て文學を味ふべし天下有爲の士此書を閉却して自ら寶を捨つるべく以て桂月先生

大町桂月先生譯評

全貳拾貳卷縮刷全壹册 紙數壹千貳百頁

袖珍特製美本 特價金壹圓貳拾錢  
定價金壹圓五十錢 小包料金八錢

編二第書叢文漢譯新

新評文章軌範

文章は經國の大業の五號活字を用ふ更に平易の口語文に通解し別に又語釋を施し文不朽の盛事本書は最も初學者の通じ易きものにして從來漢文の研究書たりし文章軌範として精神修養の大寶典見地を具せる人斯人にして斯書あるは世人の期待に負かずと

友田宜剛先生評

全七卷縮刷全壹册 紙數壹千壹百頁

袖珍總クローズ 正價金壹圓拾錢  
天金箱入特製 小包料金八錢

編三第書叢文漢譯新

濱野三郎先生註解

新譯孟子附索引

全四十卷縮刷 全壹册 紙數八百頁 郵稅八錢 正價金九拾錢

文章は奔放自由を極め英氣の潑瀾たる比喩の巧に豊富に不朽の天品世界の大文學書内容亦實に豐富に全文を和譯して之に註解を附し上欄には五十音に基く索引を添へ書中の和語を知るべきは直に其全文を求め得るの便に供したり其の正當なる註釋の穩健にして其の議論の奇抜なる其文章の雄健簡潔なる支那文學中推して第一の位置に置べきものなり其文章の雄健簡潔なる支那文學中推して第一の位置に置べきものなり其文章の雄健簡潔なる支那文學中推して第一の位置に置べきものなり

大町桂月先生譯評

袖珍縮刷 全壹册 紙數三百五十頁

新日本樂府

山陽獨得の歴史詩尊王の愛國の精神活躍す！

當代に異彩を放てる大町桂月先生鑑きに日本外史を譯され今た山陽の筆史日本樂府を譯するのみならず之を評せらる徹底の見老熟の筆又愛國の極めを渾然として古今に獨歩せる頼翁の氣魄と筆致とを躍動せしむるを以て日本歴史を知るべく以て士氣を鼓舞すべし日本男兒之を讀まば必ず案を拍つて起らん

編四第書叢文漢譯新

山陽獨得の歴史詩尊王の愛國の精神活躍す！

當代に異彩を放てる大町桂月先生鑑きに日本外史を譯され今た山陽の筆史日本樂府を譯するのみならず之を評せらる徹底の見老熟の筆又愛國の極めを渾然として古今に獨歩せる頼翁の氣魄と筆致とを躍動せしむるを以て日本歴史を知るべく以て士氣を鼓舞すべし日本男兒之を讀まば必ず案を拍つて起らん

袖珍總クローズ 正價金五拾錢  
天金箱入特製 郵稅金六錢

編五第書叢文漢譯新

大町桂月先生譯評 新譯 日本政記

史界の一大奇觀

頼山陽前に日本外史を著して武門の興廢を評き、後に日本政記を著して朝廷施政の大綱を明にせり。殊に政記は翁が死に至る迄も手刷りして止まざりしものにして、翁が大偉觀たり。然るに從來世に行はれたる政記の板本は校訂粗漏にして、實に史界の一大奇觀たり。大町桂月先生は、之を編譯せられ、一々精密に誤謬を正し、難解の語に多し。翁と先生との氣骨相俟つて紙上に活躍し、錦上更に花を添ふるの觀あり。日本政記の面目は一新す。日本國民必ず一冊を備へよ。

袖珍天金 定價金八拾錢 箱入特製 郵税金八錢

全八冊縮刷全書 紙數六百二十餘頁

編六第書叢文漢譯新

久保天隨先生譯評

新譯 十八史略

支那五千年興亡八十餘朝此間治亂成敗の跡漢滿民族の起伏消長を審にせる者を十八史略とす。本書は先生が特に意を用いて現代國語の文法に循從し、漢文に特殊なる語勢の緩急を併せ、難解の字には註解を施して、叮嚀懇切を極む。巻末には便利なる新式索引を添え、隨所に挿入せし數百條の批評は奇警峭拔其の史實と相俟つて痛快を極む。

袖珍總タロース 正價金八拾錢 天金箱入美本 郵税金八錢

全七冊縮刷全書 紙數七百頁

編七第書叢文漢譯新

友田宜剛先生譯評

新譯 續文章軌範

續文章軌範は正文文章軌範と相待つて、古今文章の雙璧古人が心血を凝して、今古の名著を離して、光彩を發せし、日文に志す者は必ず之を座右に致して、其の教養の泰斗と先生とを完全なる明治の作文模範化せらるる。

長特の書本

漢文讀方通弊たる文法の誤りに深く注意し、本文は新式ゴシック活字振假名附にして、難解の字には懇切なる解釋を施し、各文の始めには作者略傳を附し、篇末には文法と總評と相俟つて和漢の文典東西の修辭法より切實に作文法を教へ、上欄の原文を掲げて對讀に便し、且之にも古賢の興味深き評語を網羅附記し、讀者の趣味を喚起せしむ。

袖珍總タロース 正價金壹圓 天金箱入美本 郵税金八錢

全七冊縮刷全書 紙數壹千頁

編八第書叢文漢譯新

大町桂月先生譯評

新譯 國史略

全袖珍五冊 定價金八拾錢 縮刷製紙九冊 郵税金八錢

萬世一系の天皇を戴ける神州に生れながら神州の貴き所以を知らず、三千年の金銀を失せて歴史の實を知らず、人心輕佻となり、浮華となり、史を教り、古來の日本史を定評あり、日本原組のみあり、肉なく血なし、歴史教育の宜きなる、史略は古來の日本史の精華を抜き、要を扼し、大町桂月先生は、これに最も國民の生に於て、作者の精神を漢學教育衰へて此名も空しく閉却されん、と今大町先生之を評して、有益なる貴重なる國史略を復活す。



大町桂月先生校訂解題(學生文庫の内)史傳・修養・教訓・文藝・隨筆の古典名著  
袖珍特製類美本 各冊金拾錢 郵稅各金四錢 五冊以上壹割引 郵稅不用

訂新 南朝史傳 全壹冊  
神皇正統記吉野拾遺櫻雲記を收む皇統の由りて來る處を論じ國家の治亂興亡を説き南朝の正統を明かにす筆致蒼々として正大也

訂新 源平盛衰記 全五冊  
文章雄健にして而も事實の精細を極め源平二氏が成敗の跡歴然として眼前に見るが如く興味亦た津々たり

訂新 太平記 全四冊  
楠公誠忠の輝ける歴史は國史中の一異彩也當時の事蹟を總括せるは本書の外に求む可らず

訂新 曾我物語 全壹冊  
其の文章の流麗なる其描寫の委曲を盡せる實に七百年前に於ける富士山麓の復讐を目前に粲然せしむ

訂新 常山紀談 全壹冊  
名將勇士の逸話逸事を蒐録し戰國時代の武士が互に節を擡しみ義を守りし武士道の典型を示せし常山傲世の名者也

訂新 先哲叢談 全壹冊  
江戸時代前中の學者七十二人の人物性行を記せし漢文を平易に假名交りに譯せるもの興味津々として盡さず

訂新 心學道話 全壹冊  
平易にしてまかも心理に透徹し英賢談話の中に無上の教訓を含む修身齊家精神修養の良書

訂新 益軒十訓 全參冊  
人倫五常の大意を説き父母を養ふに其の志と體との二あるを示し義理と利養との輕重を論じ堪忍制欲の要勸慎儉の徳を述ぶ

訂新 日本外史 全參冊  
原文の妙味を知らんとする者は本書を讀め漢文に句讀點送り假名を附して初學者に讀み易からしむ校訂の嚴密なる印刷の精麗なる實に本書の誇とする所なり

訂新 義經記 全壹冊  
悲壯又慘愴英雄の末路人をして本讀に堪へざらしむ吉野山の雪中の條の如きは世に有數の快文字にして史跡の壯觀なり安宅の關の條に慘憺を極む

訂新 論曲全集 全參冊  
創作時代の論曲を基礎とし之に各流諸方の相違せるもの一々脚註し文章通じ難き者は細かに其出典を究めて詳説せり論曲文學を味はんと欲する者は非本書に依らざる可らず

訂新 狂言記 全壹冊  
狂言中の傑作八十番を選ぶ日本國民は快活也無邪氣也天真爛漫也故に能く笑ふ狂言記は其の笑の發揮せられたる一文藝也一藝術也快男子は狂言に對して大いに笑はん哉

訂新 一休諸國物語 全壹冊  
機智滑稽の裡に萬斛の涙を含む所之れ一休の面影の神妙也本書は彼が諸國雲遊物語の粹を集めたるものにして内容の豐富なる從來其例を見ざる所なり

訂新 太閤記 全五冊  
大師は弘法の専有となり大開は秀吉の専有となり秀吉は實に我國史上に一頭地を拔きたる大膽的英雄也競争激烈なる現代に活潑する者は戰國時代の優勝者に學ぶ所あるべし

訂新 百人一首一夕話 全壹冊  
かるたは日本特有の國民的遊戯也敏達勇致なる國民性を發揮す百人一首の註解書は多けれど能く歌を解き兼ねて作者に關する面白き材料を集めたるは本書の右に出づる者なし附録として「歌ふるた必勝法」を添へたり新年の閑日月には國民一般必讀の良書也

訂新 西遊記 全貳冊  
想像の奇著類の怪實に天外より來る者一體壯麗の奇景を描く能はざらしむ

大町桂月先生新著

# 箱根山

三五形特製 美本全一册  
正價 八金 拾八錢 郵税 八錢  
寫真 影帶 十個 入便

## 夏期第一最適の良書

日本第一の温泉場と云へば何人も先づ箱根山に屈すべし又日本第一の自然的大公園と云へば何人も先づ箱根山に屈すべし而して日本第一の紀行文家と云へば何人も先づ箱根山に屈すべし先生に屈すべし先生箱根山に遊ぶ事前後數十回蘆湖を中心とせる七八里四方の大山蓄き七湯新しき七湯は言ふも更なり熱海湯河原、伊豆山諸温泉のある處二子駒嶽金時明神明星三國鞍掛日金石權石恒神山諸峰のある處所謂八里の古道の通ずる處箱根三島伊豆山三權現道了早雲寺古祠各寺のある處先生の足跡到らぬ限なく其獨得の紀行文に案内記を兼ねて雲烟紙上に浮動し一讀人をして神遊かしむ殊に里程旅費宿料温泉の効能等最新の調査に俾り詳記して漏らさず裝幀の堅牢にして輕便なる亦破天荒なり

## 避暑温泉の最好案内書

御製 東郷平八郎閣下謹書  
一 御聖德 德富猪一郎先生謹撰

# 明治天皇

國民新 坂本辰之助先生謹記  
開記者 坂本辰之助先生謹撰

# 明治御大喪記

前宮内大臣 渡邊伯爵題詠

# 乃木大將及其夫人

國民新 坂本辰之助先生著

御聖德 德富猪一郎先生謹撰  
年譜 御聖德 御逸事 涙痕日記  
其他 光緒 寫真 コロタイア 數十種

本書は皇室皇族の事に精通せる坂本辰之助先生が齋戒沐浴し熱涙を噴みながら記し奉れる者實に聖代無かるべからざる完全の大名著聖德を仰がしむべき光輝ある永久傳家の寶典

菊判天金箱入特製 紙數四百頁全一册  
特價金壹圓廿錢  
定價金壹圓五拾錢  
郵税金拾貳錢

天下一品尊嚴なる光澤記念寫眞及び挿畫壹百六拾個  
本書を一讀せば實景眼前に髣髴して實地を見ざる人も詳細に其光景に接するを得べく永く傳家の寶典として藏すべき御大喪實記

菊判天金箱入特製 紙數四百八十頁  
特價壹圓五拾錢  
定價金 貳圓  
郵税金拾六錢

口繪大將夫妻殉死當日の記念寫眞肖像筆蹟其他稀世寫眞十數集

世に乃木大將傳の出でたるもの多し而かも本書の如く内容の完備せるものはなし行文流暢平易何人も讀み易く殊に夫人傳最も詳細を極む

菊判全一册  
定價金壹圓  
郵税金八錢

法學博士 和田垣謙三先生著  
**青** 年 諸 君

(改訂増補貳拾版)

國民新聞評、著者の滑稽と  
 妙文と世之を知る...  
 に出づる處殆んど敵手無し  
 奇書のひとつ云ふに憚らず

四六版特製  
 定價金壹圓  
 郵税金八錢

帝國大學教授 和田垣謙三先生著  
**世界商業史要**

東京朝日評、太古三千載に  
 互れる世界商業の盛衰を綜  
 覧し盡せり...  
 讀まざるべからざる良書の

菊版總タロース製  
 定價金壹圓廿錢  
 郵税金拾貳錢

和田垣博士戲著 川村畫伯繪畫  
**餅**

正月の芽出度餅に無限の寓  
 意を託して人生最大の氣持  
 心持を綴り論せしもの氣持  
 諷刺を酒脱の中に趣味と教  
 訓とに富める古今獨歩也

袖珍美本全一册  
 定價金貳拾五錢  
 郵税金四錢

皇孫殿下覽の光榮を賜ふ  
 和田垣博士 中谷無涯兩先生著 (文部省檢定済)  
**歌**

戊申詔書の聖旨を奉體して  
 解し易く曲面白く朝夕吟誦  
 せば長き大御心の程推し奉  
 られて限りなき聖恩に浴す  
 く萬民必讀の國民的唱歌

全一册  
 定價金五錢  
 郵税金貳錢

和田垣法學博士校閱

英和對譯 **寸鐵警句集**

安東鶴城先生著

法學士森田小六郎先生著

櫻痴才調滑稽鐵人  
 の肺肝を刺り又頭を解く  
 者蒐めて此中に在り世態  
 人情の秘密弱點を曝露し  
 暗々裏に處世の法を訓ふ  
 譯文亦妥當

袖珍美本全壹册  
 定價金四十五錢  
 郵税金四錢

**ヤンキ**

北澤樂天畫伯挿畫 裝幀

傲慢輕佻の米國男女を拉  
 し來つて赤裸々に解剖し  
 罵倒し笑殺し蹴弄し彼等  
 の裏面を大膽無遠慮に素  
 破抜きたる者筆鋒絶妙輕  
 快を極む

四六判特製  
 定價金壹圓貳拾錢  
 郵税金八錢

醫學博士瀨川昌耆先生述  
**新育兒のをしへ**

最

博士嶄新の學說と多年の  
 經驗とに徴し丁寧懇切に  
 説明せし者實に是れ育兒  
 上の金科玉條なり殊に卷  
 末牛乳保育法は當代最新  
 の卓説とす

菊判特製美裝  
 定價金八拾錢  
 郵税金八錢

澁川玄耳先生著

**萬金**

斯界の明星澁川氏が俄然  
 朝日新聞社を退きて浪人  
 生活に入りたる前後の日  
 記也其奇文奇想は讀者を  
 嘆止まざらしむ

四六判特製  
 定價金八拾五錢  
 郵税金八錢

小松原文部大臣題字 樂翁公眞筆  
 ○天 白河樂翁 編前

碧瑠璃園著 川村清雄畫伯裝幀

時事評、一讀巻を措くに忍びざるの思ひ世道人心を裨益する點に於て最も健全に有益なる好讀物として一般の家庭讀書界に推薦す

箱入頗美本  
 定價金壹圓廿錢  
 郵税金拾貳錢

平田内務大臣題字 樂翁公畫贊

○天 白河樂翁 編後

碧瑠璃園著 川村清雄畫伯裝幀

朝日曰く、公生涯の面目は神影ある筆端に突奕として現はる家庭の寶物として生ける教訓を與ふべく表裝の麗美なる事近來の隨一也

菊版頗美裝  
 定價金壹圓廿錢  
 郵税金拾貳錢

土方伯爵 黒田子爵題字

○史傳 高山彦九郎

碧瑠璃園著 前編後編全二冊

王政復古の首唱者忠勇節義の權化たる彦九郎が一代の事業勤王の眞面目は現代の一流の史傳小説家碧瑠璃園先生獨特の筆に由て活躍す

菊版 上製  
 定價 前編九拾錢 後編八拾錢  
 郵税金各八錢

番衆浪人著 梶半古畫伯口繪

○史傳 後藤又兵衛

小説

大厦正に倒れんとすの豊臣の天下を佐けて武士的精神を發揮したる又兵衛が千變萬化の大活躍は捕へて本書中に活躍す爽絶快絶

菊版特製四百五十頁  
 定價金壹圓  
 郵税金拾貳錢

71  
489



終